

### 3 主力艦備砲制限問題及び建艦通告要求問題

460 昭和11年10月21日 在英國吉田大使より  
有田外務大臣宛(電報)

#### 主力艦備砲制限及び日本側潜水艦保有等の問題

##### 題に関するクレーギーとの会談」について

ロンドン 10月21日後発 本省 10月22日前着

第五七五号 求メニ依リ二十日午後「クレーギー」ヲ往訪会談要旨左ノ通り

##### 一、主力艦備砲

御承知ノ通り日本ヲ除ク主要海軍国ハ十四吋制限ヲ一応承諾セリ尤モ独ハ仏、伊ニ建造中ノ十五吋艦二隻(ニ)对抗ノ為右二隻又蘇連ハ十四吋ヘ低下ニ先立チ十五若クハ十六吋砲主力艦二隻建造ノ権利ヲ求メツツアリ之ニ対シ英ハ最新式十六吋ハ在来ノモノニ比シ威力大ナルヘケレハ列強ノ相対勢力ニ影響スヘシトテ極力反対ノ結果蘇連ハ十五吋砲ニ固執スルニ至レリ之ヲモ断念セシメント

折角努力中ナリ以上ノ次第ニ拘ラス英ハ(米モ同様ナルヘシ)日本側ニ於テモ御同意ナラハ今後ノ制限ヲ十四吋ト為スノ用意アリ之カ為貴国ニシテ他国カ同様ノ制限ニ準拠スルニ於テハ今後事実上主力艦ニ十四吋ヲ超ユル備砲ヲ搭載セサルノ意向ヲ何等カノ形式ニ於テ表示シ得サルヤ又已ムヲ得サレバ Japanese Government have no present intention of mounting 14吋程度ノ意思表示ニテモ可ナリ

率直ニ述ヘンニ米カ十六吋説ナリシニ対シ日本ハ一般ニ

十四吋ヲ可トセラレタリシト了解ス此ノ際十四吋制限実現ノ機ヲ逸セハ今後主力艦々型ヲ三万五千噸以下トスル望ハ皆無トナルノミナラス十六吋砲維持ハ却テ今後ノ主力艦々型ヲシテ三万五千噸ヲ超エシムルノ傾向ヲ生セシムヘシ御承知ノ如ク目下独、蘇諸國ト英國間ニ頻リニ会談ヲ行ヒ居ル関係上今後一箇月位ノ内ニ御返事ヲ得ハ極メテ幸ニ存ス申ス迄モナキ儀乍ラ右ハ日本ノ三六年新条約加入等ヲ求ムル趣旨ニハアラズ本件ニ対シ極メテ非公

### 三、防備制限問題

米側ヨリ華府条約第十九条ハ海軍制限条約、四国条約等ト関連シ幾多ノ讓歩交換ノ結果米ノ受諾セル所トナリシカ華府諸条約ハ種々ノ変更ヲ受ケタリ海軍問題ノミニ付テ言フモ日本ハ華府海軍条約廃棄、三五年海軍會議脱退ヲ為シ又頃日三六年倫敦条約不加入ヲ明カニセリ而シテ極東ニハ殆ト定期的ニ重大ナル変更起リツツアルヲ以テ

米政府ハ問題ノ一方ノミノ帰結ヲ図ラントスルハ賢明ナラストノ趣旨ノ回答アリタリトノ九月二十四日付在米英代理大使発電報ヲ内示シ右ハ最終的回答トハ思考セス貴方ニ於テ英提案ニ御賛成ナラハ米ト更ニ談合ノ余地モアルヘキヲ信スト述ヘタリ

右三点ニ関シ何分ノ儀御回示請フ  
米ヘ転電セリ

461 昭和11年10月22日 在英國吉田大使より  
有田外務大臣宛(電報)

#### 主力艦備砲制限に関するクレーギーとの会談

5 会議脱退後における諸交渉  
貴方ハ米提言ノ如ク潜水艦保有ニ付「エスカレーター」  
シ本使ハ自分一己ノ推測ナルモ帝国海軍ハ必シシモ備砲制限ニ反対ト言フニハアラサルヘキモ只今ノ所一切ノ条約上拘束ヨリ離脱シ度シトノ気分ト了解ス貴方ノ御趣意ハ一応本国政府へ取次キ何分ノ返答ニ及フヘシト答へ置キタリ

### 二、日本側潜水艦保有問題

貴方ハ米提言ノ如ク潜水艦保有ニ付「エスカレーター」  
条項ヲ援用セラルルヤトノ「ク」ノ間ニ対シ政府ヨリ何等報道ニ接セサルモ未タ直ニ米提言ニ応セサルヲ見レハ同意ト言フニハアラスト答へタル処「ク」ハ此ノ際寧ロ virtual settlement ニ依リ英ハ「ホーキングス」級艦ヲ貴方ハ潜水艦ヲ米ハ然ルヘク其ノ欲スルモノヲ保有スヘキコトヲ宣言シ相互ニ異議ヲ申立テサルコトシテハ如何ト述ヘ本使ヨリ右ニ対シ米側ノ意向如何アルヘキヤト反問セルニ米ヘハ英側ヨリモ其ノ説得ニ協力スルヲ辞セス一九三〇年条約ノ終期ニ於テ協約国唯合ヒテ物笑ヒトナルハ甚タ面白カラス理論ニ偏スルヨリモ寧ロ實際ニ即スル解決コソ望マシキモノナリト付言セリ

ロンドン 10月22日後発  
本省 10月23日前着

## 第五七八号（館長符号扱）

一、往電第五七五号ノ一「ク」提言ハ曩ニ三十六年新条約加入方懲憲シ日本ノ拒否スル所トナリタルモ同条約第四条ノ二ノ規定ニ照ラシ又十四時説夫レ自体ハ一昨年及昨年ノ両会商中必スシモ日本側ニ於テ反対スル所ナラサリシヲ想起シ出来得ヘクンハ我方ノ協力ヲ得独、蘇ヲ説得シ倫敦条約失効前主力艦備砲最大口径十四吋ノ原則ヲ何等カノ形式ニテモ作り上ケ（米カ十五吋ニ反対ナルハ御承知ノ通りナリ）十六吋最大限棄却主力艦単艦最大排水量増大傾向ノ阻止ヲ目的トスルニアルカ如シ同入ノ口吻ニ照ラスニ英側ハ前記我方拒否ニ鑑ミ今日迄本件提言方ヲ久シク躊躇遠慮シ来レモノノ如キモ前顯第四条ノ規定ノ外往電第五七五号所報ニ国会談及三十年条約実施期限終了期ノ目睫ニ迫レルニ鑑ミ遂ニ正面ヨリ切出シ来ルモノト認メラル

111、本件ハ實ハ初対面以来「ク」ノ熱心ニ説ク所ナリシモ本使ハ我海軍側ハ依然量的制限ナクノハ質的制限ナシト

ノ態度ヲ維持スルモノナリト推シ敢テ取合ハサルニ努メ二十日「ク」ヨリ後頭申入ニ對シテモ帝国海軍ハ一切ノ条約上ノ拘束ヨリ脱シ度キ氣持ナラント応答シタル次第ナリ

難シ且英側ハ形式ノ如何公式非公式ヲ問ハス單ニ「ブレンゼント・インテンション」ノミニテ可ナリト迄打解ケ申入レ居ル次第ナレハ國際情勢ノ変転不可測ノ今日将来ノコトヲ「コンミット」シ得サルハ英トシテモ充分理解スベク将又日英海軍ノ関係ニ付テハ海相其ノ他ノ旨ヲ含ミ着任以来本使ノ特ニ留意スル所両国海軍ノ将来ノ関係ヲ顧慮シ差当リノ所英ヲ満足安心セシムル様取計ハレ本件ヲ單ニ海軍軍縮關係ノ一事項トセラレス日英國交ノ大局ヨリ御考慮仰度ク卑見不取敢申進ス

462 昭和11年11月13日

在英國吉田大使より  
有田外務大臣宛（電報）

主力艦に十六吋砲採用に付する日本側の意向  
打診並びに我が方潜水艦保有と第二十一條との  
関係等に関するクレーヤーとの会談にて

ロンドン 11月13日後発  
本省 11月14日後着

十一日午後「ク」ト会談要旨左ノ通

111、往電第五七五号ニ關シ帝国政府回答ノ有無ヲ問ヘルニ付未タナシト答ヘタルニ「ク」ハ少クトモ日本政府側ニ於テ真向ヨリ拒否シテ本問題ノ門戸ヲ閉鎖サレサル様切望ス十六吋ハ米國側ノ希望スル所ニシテ英ハ日本側ノ態度分明ナラサルヲ理由トシテ米ヲ抑ヘ居ル次第ナリ日本側ニ於テ拒否ノ回答ヲ為スニ於テハ米ハ明日ヨリモ十六吋砲採用ニ出ツベク而シテ十六吋砲三万五千噸型ハ top heavy ミシテ good ship ナラストハ専門家ノ一致スル所ニ付三万五千噸型モ遂ニ維持出来スシテ巨艦競争トナリ其ノ端ヲ開ケルモノハ貴國ナリト為スベク國際不安ノ今日甚々面白カラサル事態ヲ惹キ起スナキヲ保セス故ニ此ノ際本件ハ英政府ノ最重視スル所ニシテ予々申上ケタル通り何等カノ形式ニ依リ日本政府ノ御協力ヲ願ヒ居ル次第ナリ就テハ在日英大使又ハ同海軍武官ヲシテ右英政府ノ意ノアル所ヲ目下ノ歐州情勢ト共ニ永野大臣ニ申入レンメテハ如何ナルモノニヤト申出テタリ本使ハ貴國政府ノ執ラルル措置ヲ兎ヤ角申述フルノ趣旨ニハアラサルモ先般会見以来未タ左シテ時日モ経過シ居ラス永野大臣ニ於テモ勿論本件考慮中ノコトナルヘケレハ余リ本件回

答ノ督促ガマシクサルルモ如何ト存ス但シ貴方海軍武官  
カ専門ノ立場ヨリ同大臣ト会見シテ目下欧洲ノ形勢ヨリ  
事態説明セラルルハ不可ナラサルヘシト応酬シ置ケリ從  
テ或ハ同武官カ海軍大臣ニ引見方申出スルヤモ知レサル  
ニ付御含置キ請フ

二、次テ往電第五七五号所載「ク」ノ所謂「バー・チュアル  
セツトルメント」ノ具体案トシテ別電第六二四号趣旨ノ  
「エードメモアール」ヲ手交シ其ノ趣意ヲ敷衍シテ説明  
ヲ加ヘタリ依テ本使ハ本案ノ内容ニ米ハ同意ナリヤト質  
セル処米ニハ之ヨリ話ス積リナリト述ヘタルニ付本使カ  
○級艦保有ニハ米ハ反対セサルヘキヤト問ヒタルニ之ヲ  
好マナルヘキモ反対シ通シハシマジ然ラハ何故ニ米ハ二  
十一条ノ援用ヲ主張シ貴方モ亦同様ニ援用セントセラル  
ルヤト言ヘルニ米ハ上院ヲ面倒ト思フハ貴方ニ於テ枢密  
院關係ヲ顧慮セラルト同様ナリ同条ノ援用ハ米ノ上院  
及貴方枢密院等ノ御都合ヲモ考ヘ其ノ方面倒ナカルヘキ  
トノ趣旨モ含メ居レリ英カ五巡洋艦保有ニ対シ米ノ保有  
艦ハ如何ト問ヘルニ米ニハ巡洋艦ノ保有ヲ申出ツヘキモ  
ノナケレハ驅逐艦保有ヲ申出ツヘシャト想像スト答ヘリ

463 昭和11年12月8日 在英國吉田大使より  
有田外務大臣宛(電報)

ワシントン条約第十九条更新問題に対する日  
本側の速かな回答をクレーギー要望について

ロンドン 12月8日後発  
本省 12月9日前着

第六九五号(極秘)

往電第五七五号ニ関シ

七日付ニテ「クレーギー」ヨリ華府条約第十九条<sup>(編注)更新問題</sup>  
ニ関シ近ク議会ニ於テ質問アルヘキ處英側トシテハ貴国政  
府回答接到後本件關係声明ヲ為サント欲スルモ同条失効期  
日目捷ニ迫レル關係上之以上右声明ヲ差控フルコト不可能

トナルヤモ知レス就テハ早目ニ御回答願ヘ間敷キヤト申越  
セリ米ハ既ニ兎モ角一応ノ回答ヲ為シ居リ(冒頭電三参考)  
照) 条約失効ノ日モ旬日ノ後ニ切迫又本月三日即チ往電第  
六七九号発電ノ翌日「ク」ハ寺崎ニ対シ遠慮勝ニ回答ノ有  
無ヲ問合セタル趣ナルカ英側モ之迄可ナリ忍シテ我方ノ回  
答ヲ待倦ミ居リタルハ本使モ承知シ居リ本使亦貴方ノ御都  
合ヲ慮リ敢テ督促ヲ差控ヘ居リシモ此ノ上ノ遷延ハ日英関  
係上モ却テ宜シカラスト存セラルルニ付冒頭電關係事項一  
括トハ申ササル迄モ御決定ノモノニ付折返シ御回示相成度  
シ

編注 要塞及海軍本根拠地に關する現状維持の約定

464 昭和11年12月23日 在英國吉田大使より  
有田外務大臣宛(電報)

主力艦備砲最大口径問題に対する速かなる見  
解回示について

兹ニ於テ本使ハ我方潜水艦保有ト第二十一条トノ關係ニ  
関シ三十年會議當時我方ハ本件ニ関シ同条ヲ援用セスト  
ノ了解アリシヤニ記憶セルニ此ノ点如何ト質セルニ「ク」  
ハ右様ノコトアリタリヤト漠然ト答ヘ居リタリ惟フニ右  
ハ本使カ本点ヲ「レイズ」セルニ拘ハラス明言セサルハ  
既ニ公文ニ援用方ヲ記載セル次第モアリ當時ノ「ミニ  
ユツト」所載ノ箇所ヲ援用スル考ナキヤニ考ヘラレタル  
ニ付此ノ際余リ突込マサル方良シト考ヘ其ノ儘ニセリ別  
電第六二四号ニ對スル回答振及本電ニニ関シ心得置クヘ  
キ点成ルヘク早目ニ御回電請フ

米ヘ転電セリ

ロンドン 12月23日後発  
本省 12月24日前着

第七三一号(館長符号扱)

往電第五七五号ニ関シ

一、主力艦備砲最大口径ノ問題ハ政府ニ於テ引続キ御考慮  
中ノコトト存ス殊ニ量的制限ナクハ質的制限ナシトノ見  
地ヨリ先般ノ會議ヲ脱退シ決裂ノ責任負担ヲモ敢テ辞セ  
ストセラレタル帝国政府トシテハ國內的ニ種々困難ナル  
ヘシト思考スルモ會議後既ニ年余國際形勢変遷モアリ累  
次御回訓方督促ニ及ヒタルモ敢テ更メテ御考量ヲ仰ク  
二、C級艦ニ関スル御回答ニ対シ英側ノ深ク感謝シ居ル次  
第ハ往電第七一五号特ニ同第七二〇号末段ニ依リ御承知  
ノ通りナルカ右ニモ増シ英ノ関心ヲ有スルハ本件ニシテ  
本使ニハ遠慮シ頃來屢寺崎ノ來訪ヲ求メ同人ニ対シ「ク  
レーギー」ハ既ニ本使ニ語レルト大体同趣旨ニテ英ノ立  
場乃至憂慮ヲ訴ヘ蘇独トノ交渉モ其ノ後順調ニ進展シ  
月早目ニ調印ノ運トナルヘク「スカンジナビア」諸國、  
波蘭トノ間ニモ亦近ク協定成立スヘク伊太利ニ付テモノ  
様ニ希望シ居レリ從テ此ノ種協定外ニ立ツモノハ貴方一

國ノミトナリ日本ニ於テ只今ノ處十四時ヲ超ユル砲ヲ搭載スル主力艦ヲ建造スルノ意ナシトノ切メテ非公式ノ「インチメーション」ヲ得ルニアラサレハ左ラヌタニ十六時砲ノ「ストック」大ナル關係上其ノ他ニテ英ノ新条約批准ヲ迫リ居ル米ハ愈英ニ之ヲ督促シ以テ十六時砲継続ノ実現ヲ期スヘシ右ノ如クンハ現在ノ単艦最大排水量ニテハ「トップヘビー」ナリト彼等専門家ノ異口同音ニ唱ヘ居ルニ鑑ミ其ノ増大ハ火ヲ見ルヨリ明カニシテ遂ニ四万噸或ハ四万五千噸型ノ出現ヲ惹起スヘシ右ハ華府條約前ノ状態ノ再来ニシテ国帑ノ負担言フヘカラサルモノアルヘキハ勿論國際關係ニ甚々重大ノ影響ヲ生スヘシ

三、御承知ノ如ク海軍ハ英ニ取り死活ノ問題タルカ故ニ米ニシテ右ノ如キ建造ヲ行ハシカ英ハ如何ナル犠牲ヲ払ヒテモ之ニ「フォロー」セサルヲ得ス而シテ軍備ノ相対性ヨリ歐州諸国モ自然之ニ倣フノ形勢ヲ馴致シ其ノ影響ノ及フ所全般的タルヘシ右ノ如キ形勢発生ノ回避ハ今ヤ一ニ日本政府ノ決意ニ懸レリ本件ハ最早専門事項ニハアラス「ボリチカル・イツシュー」タリ貴國政府カ条約上ノ拘束ヨリ一切離脱シ度シトノ御意向ナルハ充分察知シ居レ

リ依テ三十六年条約ニ御加入ヲ御勅メセス条約問題ニ依リ貴方ヲ煩ハササルヘシ然レ共本件御願ハ非公式「インチメーション」ニ止マリ且軍艦關係事項ニ関スル當方最後ノ御願ナリ米ヲ「プロボーグ」シ英ヲモ其ノ渦中ニ捲込マレサル様希望ニ堪エス当地ニ於テハ既ニ吉田大使ニ英側意向ヲ充分申上ケタルカ本件ノ前述政治的意味合ニ於ケル重要性ハ之ヲ在日英大使ヨリモ申入レシメテハトモ考ヘ居レリト述ヘタルニ対シ寺崎ハ本件ハ先般會議ニ於ケル我方ノ立場主張ニ鑑ミ輕々ニ決定シ得サル事項タルカ故ニ未タ回答ナキモノト推スルコト及右英大使ノ申入ハ英側カ希望セラルルニ於テハ本使ニ於テモ異議ナカルヘシト答ヘタル趣ナリ

四、「ク」ノ非公式通報トハ本使ヨリ「ク」ニ宛テ三十六年条約第四条ニ依レハ十四時ニ決定ノ為ニハ日本政府ヨリ仮令非公式ノ形ニテモ何等カノ「インチメーション」ヲ必要トスルコトヲ貴下ヨリ申出アリタル処日本政府ハ目下同条約所定事項ノ何レニ關シテモ何等 contractual obligation 負担ノ意ナキモ独蘇ヲ含ム他ノ一切ノ主要海軍国カ之ヲ受諾スルニ於テハ日本政府ハ have no

present intention of mounting on their future capital ships a gun in excess of 14 inches ナリ但シ日本政府カ右見解ヲ変更スル場合ニハ速ニ之ヲ通報スベシトノ趣旨ヲ申入ルルコトヲ意味スルモノナリ前記「ク」ノ希望ニ付テハ本使ノ本件ニ關スル所見ハ既電ノ通リナルカ何時ニテモ取消シ得ルモノトセハ此ノ際一時ナリトモ先方ノ希望ニ応スルモ差支ナク寧ロ応セサレハ我ニ於テ十四時以上ノ備砲ヲ考ヘ居ルモノト直ニ邪推セラル危険アリ就テハ至急御詮議ノ上何分ノ御回電ヲ希望ス

465

昭和12年1月16日

在英國吉田大使より  
有田外務大臣宛(電報)

伊國側主力艦備砲最大口径を十四吋とする旨の通報に關しタイムスの記事について

本 省 1月17日前着

466

昭和12年3月(30)日

在ニューヨーク井上總領事代理より  
佐藤外務大臣宛(電報)

「最後ノ海軍縮少」と題す「一ノ一」  
タイムス記事論旨報告

伊英大使館ヨリ電報アリタル由ナリ

伊、伊、米、独ヘ暗送セリ

十六日各紙ハ伊カ今後建造セラルヘキ主力艦備砲最大口径ヲ十四吋ト為スノ意アル旨ヲ通報シ來レルコト、日本

本 省 3月30日後着

第一三三号

### 特情紐育第三九号

二十九日ノ「ニューヨーク・タイムス」ハ「最後ノ海軍縮少」ト題シ左ノ如ク論シテ居ル

日本外務省ハ英國政府ニ対シ新倫敦海軍条約ノ主力艦備砲制限ニ参加シナイ旨通告シタカ日本政府カ意識シテ無イニ

モセヨ右通告ハ英米両国ニ対スル建艦競争ノ挑戦テアリ太洋ノ危険状態ヘノ途ヲ開カウ日本軍部ハ防備ノ為ニ十六時又ハ十八吋砲ヲ必要トスルト思フカ知レヌカ英米両国政府モ日本政府モ同様又ハ夫レ以上ニ有力ナ軍艦ヲ建造スル

コトハ当然タ其ノ結果ハ明カニ列強間ノ相對的海軍力ト安全感ニハ何等變化ヲ齎ラサスシテ唯各國軍事予算カ数千万増大ヲ見ルノミ日本政府ハ四万噸乃至五万噸ノ大主力艦ノ建造計画ヲ否定シテ居ルカ備砲口径ノ制限サヘ受諾セヌ事実ニ徴シ日本政府カヨリ大ナル主力艦ヲ建造スル意図ヲ抱

イテ居ルト推測スルニ充分タ米国政府ハ「ペナマ」運河通過ノ關係上斯ル巨大ナ主力艦ヲ建造出来ス從ツテ作戦的ニ有利ト日本政府ハ考ヘテ居ルカモ知レヌカ馬鹿ケタコトタ日本政府カスカル軍艦ヲ建造スレハ現在ノ比率維持ノ為米国政府モ軍備ヲ拡張シ延イテハ日米両国間ニ政治的不安ヲ

### 特情倫敦第一八号

三十日ノ「タイムス」紙ハ「日本ノ責任」ト題シ左ノ如ク論シテ居ル

華盛頓條約ハ欠陥カアツタ為遂ニ廢棄ヲ余儀ナクサレタカ少クトモ過去十四箇年ニ亘リ何レノ國ノ安全ヲモ害セス海軍競争ヲ防止スルコトカ出来以テ善意ト國際關係改善ノ真意ノ為シ得ル所ヲ如実ニ示シタ新倫敦條約ハ從來ノ條約程広汎テハナイカ合意ノ最大限度ヲ示スモノテアリ何等差別

467 昭和12年3月(31)日在英國吉田大使より  
佐藤外務大臣宛(電報)  
海軍會議を脱退した日本の責任についてのタ  
イムス記事報告

ロンドン

本省 3月31日前着

発

譲スコト明カタ日本政府ハ倫敦會議カラ脱退スル時建艦競争ヲ避ケ度イト断言シタシ今モ尚軍拡競争ヲ欲シナイ旨ヲ

声明シテ居ルカ最後ノ軍縮タル備砲口径十四吋制限ヲスラ容レナイノハ以上ノ言明ト大イニ矛盾スル

英ヘ転電セリ

578

### 主力艦備砲口径問題に關する米国大使のH-1

ス・メドホール

UNITED STATES OF AMERICA

EMBASSY OF THE

AIDE MEMOIRE

ヲ設ケス一切ノ当事國ニ均シク適用サレル点テ公正テアルト共ニ華盛頓條約同様ノ利益ヲ有シ延イテ世界全般ニ利スル所カララウ此ノ事實ハ同條約ノ支持者ノミナラス一般ニモ認メラレタ所テ日本ヲ除キ一切ノ海軍国モ均シク同意見ト見ラレテ居ル尤モ伊国政府ハ未タ新條約ニ調印シナイカ其ノ最モ重要ナ条項タル主力艦備砲口径制限ニハ既ニ受諾ヲ通告シテ居ル海軍競争防止協定ハ一切ノ日星シイ海軍国ヲ拘束スル場合始メテ實効的テアリ日本政府モ右ノ如キ協定成立ノ希望ヲ表明シテ居タカ自國提案ノ一切ヲ包含シテ居ナイ條約細目ノ討議ヲ潔シトヤス海軍會議ヲ脱退シタ新タナ競争ヘノ第一步ハ十四吋砲制限条項ヲ無視十六吋ヲ採用スルコトタ日本政府ハ海軍會議ヲ脱退シタカ四月一日迄ニ軍拡ヲ行ハスト公約シタラ日本政府ハ斯ル不幸ナ競争ヲ防止シ得タテアラウ世界カ又々無制限ナ海軍競争ノ愚ヲ犯スニ至ルトスレハ其ノ責任ノ所在カ何人ニアルカ殆ント疑問ノ余地カナイ

As the Japanese Government is aware the terms of the 1936 London Naval Treaty provided that in the future caliber of guns on battleships shall be reduced from sixteen inches to fourteen inches. This was conditional, however, upon the acceptance of this provision of the treaty by all those Powers which were parties to the 1922 Washington Naval Treaty by April 1, 1937. The 1936 treaty has been ratified by the United States Government but, because of the fact that the condition of a general agreement to the limitation to the fourteen-inch caliber of guns for battleships was not fulfilled, that limitation has not become effective.

The Government of the United States feels

that it has now become necessary to decide the caliber of the guns to be mounted on the two new battleships for which the Congress of the United States has made appropriations and which are now in process of construction. It also becomes necessary to decide the caliber of the guns to be mounted upon further and additional battleships, appropriations for the construction of which may soon be asked of the Congress by the President.

In view of the fact that the Government of the United States is sincerely committed to the principle of armament reduction it is entirely willing to accept a limitation to fourteen inches of the caliber of guns for battleships provided that a similar limitation is adopted and adhered to by the other principal naval Powers.

While the President would find deplorable the

necessity of having to increase the caliber of the guns to be mounted in the new capital ships of the United States to sixteen inches, a decision must soon be made and if the other principal naval Powers are not willing to maintain a limitation to fourteen inches the President may find it necessary to recommend the increase above mentioned.

The adoption of the fourteen-inch gun caliber as a maximum, subject to adoption of that limitation by the other principal naval Powers, was one of the important points of agreement reached by the Powers who negotiated the 1936 London Naval Treaty. This fact gives rise to the sincere hope on the part of the United States Government that this one phase of limitation may be achieved for immediate and effective application and thus remove an element of suspicion and uncertainty which is detrimental

to the best interests of all the concerned Powers.

Accordingly the Government of the United States desires to inquire whether the Japanese Government would be willing to maintain this one phase of naval limitation. For the information of the Japanese Government it may be stated that this inquiry and proposal are being made at the same time to all the naval Powers who are parties to the Washington Treaty.

The Government of the United States would appreciate receiving a reply before the 21st of this month.

Tokyo, June 7, 1937.

(右仮訳)

主力艦備砲口径制限問題(閣議)六月七日

在京米国大使ヨリ・広田大臣「手交シタル

「ハーベストーン」(仮訳)

日本政府ノ承知ヤラルル如ク一九三六年倫敦海軍条約ノ条項ハ主力艦備砲ノ口径カ将来十六吋ヲ十四吋ヲトケル

他ノ主要海軍国ニ依ル本件制限採用ヲ条件トシテ十四吋砲口径ヲ最大限トシテ採用シタルコトハ一九三六年倫敦海軍条約ヲ妥結シタル諸国ノ到達セル合意ノ重要点ノ一タリキ此ノ事実ハ米国政府ヲシテ此ノ制限ノ一様式カ直ニ有効ニ適用セラレ以テ関係国全部ノ最大ノ利益ニ害アル猜疑及不安ノ要素ヲ除去スルニ至ランコトヲ衷心希望セシム  
仍テ米国政府ハ日本政府カ海軍制限ノ右ノ一様式ノ維持ヲ欲セラルルヤヲ問ヒタシ日本政府ノ参考迄ニ本件質問及提議ハ華府条約締約国タル海軍国全部ニ同時ニ為サレツツアルモノナルコトヲ記シ得ヘシ

米国政府ハ本月二十一日前ニ回答ヲ得ラルレハ幸ナリ

一九三七年六月七日

東京米国大使館

469 昭和12年6月16日 在米國斎藤大使より  
廣田外務大臣宛(電報)

主力艦備砲に関するワシントン・ヘラルドの

報道について

ワシントン 6月16日後発  
本 省 6月17日前着

第一八六号

470 昭和12年7月12日 在米國斎藤大使より  
廣田外務大臣宛(電報)

新主力艦二隻に十六吋砲を搭載する旨米國務省公表について

第一八六号

ワシントン 7月12日後発  
本 省 7月13日前着

第二一四八号 往電第一八六号ニ関シ

十日国務省ハ新主力艦二隻ニハ十六吋砲ヲ搭載スルコトト英ヘ転電シ紐育ヘ郵送セリ英ヨリ独、仏、蘇及伊ヘ郵送アリタシ

471 昭和13年1月20日 在英國吉田大使より  
廣田外務大臣宛(電報)  
日本の主力艦建造臆測情報に関するタイムス  
記事について

ロンドン 1月20日後発  
本 省 1月21日前着

第四一号  
中との報道について  
米・英・仏において大型戦艦建造問題を審議

472 昭和13年1月23日 在ソ連邦重光大使より  
廣田外務大臣宛(電報)

先般來本邦主力艦建造ニ関シ各紙共頻リニ臆測的記事ヲ掲ケ居リシ處「バイウオーター」ハ信頼スヘキ筋ヨリノ聞込ナリトテ日本ハ四隻ノ十六吋四万三千噸級主力艦ヲ建造シ

ツツアリト報シ二十日「タイムス」ハ大要左ノ如キ論説ヲ

第六九号

十六日華府「ヘラルド」ハ確ナル筋ヨリノ情報トシテ左ノ趣旨ヲ報道セリ

一、主力艦備砲口径ヲ十四吋ニ制限スルコトニ付米国ハ日本ニ、英國ハ蘇連及独逸ニ新ニ申入ヲ為シタルコト

二、右申入ニ関シ蘇連ハ応諾ノ意向ヲ有スルコト判明セルモ独逸ノ態度ハ未タ判明スル迄ニ至ラサルコト

三、大統領ハ十七日開札ノ新建造主力艦二隻ニ搭載スヘキ備砲ヲ十四吋ト為スヘキヤ又ハ十六吋ト為スヘキヤニ付決定ヲ保留シ居ルモ六月三十日頃迄ニハ右ヲ決定スルノ要アリ

四、日本カ本件申入ヲ拒絶スル場合ニハ米国ハ十六吋砲ヲ搭載スルコトナルヘキコト

英ヘ転電シ紐育ヘ郵送セリ英ヨリ独、蘇ヘ転電仏、伊ヘ郵送アリタシ

582

共情

我海軍當局ノ否定ニ拘ラスニ二十二日ノ新聞ハ二十日紐育「タス」電トシテ信スヘキ筋ヨリノ報道ニ依レハ米、英及仏ハ倫敦條約規定以上ノ大型戦艦建造問題ヲ審議中ナルカ右ハ日本カ四万五千噸以上ノ戦艦三隻建造中ナル報道ニ関連スト報ス

473 昭和13年1月24日 在米国斎藤大使より  
広田外務大臣宛(電報)

一九三九年度米国海軍予算につき報告

ワシントン 1月24日後発  
本 省 1月25日前着

第三七号

二十一日下院本會議ハ曩ニ予算委員会ヨリ回付セラレタル  
三九年度海軍予算法案ヲ無修正ニテ通過セシメタル処同予算總計五億五千三百二十六万余弗ニシテ現行予算ニ比シ約二千六百七十二万弗ヲ増加シ三九年度予算見積額五億六千四百四十万弗ニ比シ一千百十三万弗ノ減少ヲ示シ居レリ右ノ内建艦費一億三千八百六万余弗ニシテ三九年度ヨリ開始セラルベキ新建造計画ニ要スベキ経費一千八百四十二万弗

紙上チエスター・ローウエルハ右ニ関シ野田海軍少将トノ  
会見談ヲ報セル同月二十日東京発UP通信ヲ引用シ大要左  
ノ如ク論シ例ニ依リ毒筆ヲ揮ヒ居レリ

野田少将ハ日本ハ建艦競争ニ参加スルノ意図ナク日本政  
府ハ今日ニ於テモ対等ノ条件ニテ海軍々縮協定ニ入ルノ  
用意アルヲ示シ自國ニ於ケル建艦計画ニハ触レス只タ既  
定方針ヲ固守スルノミト述ヘ列國カ日本ノ此ノ態度ニ信  
頼センコトヲ求メタル處列強カ斯ル既定方針ニ信頼シ得  
ルトセハ問題ハナカルヘキモ日本カ從来其「既定方針」  
ハ別トシ國際条約ニ忠実ナリシヤ否ヤハ各國共既ニ知リ

尽シ居レリ、元來華府會議以前ニ於テハ英米両國ハ支那  
ノ領土保全及機會均等ヲ強力ナル海軍ヲ以テ擁護セント  
シ來レルモ同會議ニ於テ支那領土保全ヲ約セル九国条約  
ヲ締結シ日本ノ條約遵守ヲ期待シテ日本ニ今日ノ強力ナ  
ル海軍ヲ許シタルモ日本政府ハ当初ノ予想ヲ裏切り該条  
約ヲ破棄スルニ至レリ、野田少将ノ求ムル所ハ何等斯ル  
政治上ノ考慮ヲ加ヘス此ノ上更ニ大ナル海軍力ヲ保持セ  
ントスルモノナルカ現下ノ如キ國際情勢ニ於テハ英米両  
國共其国防上ノ必要ヲ充シ且両國海軍ヲ合スレハ西太平

5 会議脱退後における諸交渉

(戰闘艦二、巡洋艦二、駆逐艦八、潜水艦六、掃海船一、

潛水母艦一、給油船一、曳船一、合計二十二隻)既ニ着手  
セル建造計画ノ継続費一億一千九百六十四万弗ナリ(戰闘  
艦二、航空母艦三、巡洋艦八、駆逐艦四十三、潜水艦十六、  
飛行艇母艦一、合計七十四隻)

英、紐育ニ転報セリ

474 昭和13年1月24日 在サン・フランシスコ塩崎總領事より  
広田外務大臣宛(電報)

日本の建艦説に関する新聞論評について

ワシントン 1月24日後発  
本 省 1月25日前着  
（2月14日接受）

第四七号

昭和十三年一月二十四日 在桑港

外務大臣 広田 弘毅殿 総領事 塩崎 観三 (印)

日本建艦説ニ関スル新聞論評報告ノ件  
最近米国海軍拡張問題ニ関連シ当國新聞中日本ニ於テ四万三千噸級主力艦秘密裡ニ建造セラレツツアリ等種々報道セラレ居ルハ御承知ノ通ナル處一月二十一日桑港クロニクル

洋ニ於ケル日本海軍ノ優勢ヲモ挫クニ充分ナル海軍力ヲ築ク以外ニ方法ナカルヘシ尤モ英米両國ハ今次日支事變ニ直ニ其海軍力ヲ使用スル意図ハナク又現在ノ處英米共同動作ヲ目的トスル海軍協定ニ入ルコトニモ政治的困難アルモ将来使用シ得ヘキスル圧力ノ存在シ居ルコトヲ日本ニ知ラシムレハ現在日本陸海軍ノ夢ミ居ルカ如キ荒唐無稽ノ計画ハ大ニ其実現性ヲ減殺スヘシ

本信写送付先 在米大使

475 昭和13年1月28日 在米国斎藤大使より  
広田外務大臣宛(電報)

ルーズヴェルト米国大統領の軍備拡張に関する教書について

ワシントン 1月28日後発  
本 省 1月29日前着

第五五号

二十八日大統領ハ議会ニ對シ軍備拡張ニ関スル教書ヲ発シタルカ右ハ米国ハ從来軍備縮少ニ努力シ來リ今後モ之ニ向ヒ努力スヘキモ今日迄ノ所失敗ニ帰シ各國ニ於ケル軍備拡張ハ未曾有ノモノニシテ當國ノ國防力ハ當國ノ安全ノ為充





ル事却テ軍備競争ヲ招来スルノミナラス世界ノ平和ヲ脅威スルモノナル事等ヲ徹底的ニ非難攻撃セハ當国内現政策ニ反対ノ議員並ニ輿論ヲ援ケ日本ニ執リ有利ナルヤニ

觀察セラル（先般ノ「プレスインタービュー」ハ當国各新聞ニ掲載セラレ有効ナリシ様認ム） 二十八日

（付記二）

（一三一三〇） 在米館付武官

軍務局長

軍令部第三部長

既報大統領ノ海軍拡張ニ関スル教書ニ基キ下院海軍委員長ワインソンハ左記海軍拡張案ヲ議会ニ提出セリ（本計画ニ依ル建艦中ニハ既ニ議会ヲ通過セルモノ及現ニ議会ニ提出済ノモノヲ含マズ又括弧内噸数ハ本計画ノ基礎保有量ヲ示シ本計画完成時ニ於テ本量ノ艦齡内艦船ヲ保有セントスルモノナリ）

一、主力艦三隻一〇五〇〇〇噸（八隻六三〇〇〇〇噸）  
航空母艦二隻三〇〇〇〇噸（八隻一六五〇〇〇〇噸）  
巡洋艦八隻六八・七五四噸（四七隻四一二・五一四噸）  
駆逐艦二十五隻三八〇〇〇噸（一四七隻二三八〇〇〇噸）

潜水艦九隻一三・六五八噸（一八隻八一・九五六噸）右ノ内主力艦二隻巡洋艦二隻ノ建造ハ本年中ニ開始（大統領教書中ニ示ス）

二、水雷母艦五隻四五〇〇〇噸、潜水母艦三隻二一七〇〇〇噸、大型水上機母艦四隻三三・一一〇〇〇噸、小型水上機母艦七隻一一・五五〇〇噸、工作艦三隻二八・五〇〇噸

三、一隻三千噸ヲ越エサル特種艦船（快速力小型艦船ナリト説明セルモノアリ）若干隻建造費千五百万弗ノ支出

四、飛行機総数三・〇〇〇機ノ充実（約一・〇〇〇機ノ増加）

五、約一・二〇〇名ノ士官一〇〇〇〇名ノ兵員ノ乗員（士官総数八・二五〇名兵員総数一三八・〇〇〇名トナス）

六、以上ニ對スル予算総額ハ第三項以外明示シアラズト雖モヴァインソンノ説明ニ依レハ約八億弗ナリ

七、本計画ノ完成期ハ明示シアラス一九四二年ナルヘントナス）

推定セル向モアリ

（付記三）

（一三二三） 在米館付武官

軍務局長

一、一月三十一日及二月一日下院海軍委員会ニ於ケル新「ヴァインソン」案ニ閲スル作戦部長ノ説明並ニ質問答弁中注目ノ要アリト認メラル諸点左ノ如シ

（一）米海軍ハ守勢作戦ヲ執ラズ本土ヨリ遠隔セル地点ニ敵

ヲ邀撃シ成ルベク早キ時機ニ於テ味方最小ノ損害ヲ以

テ敵ニ戦意ヲ失ハシムルニ足ル打撃ヲ与フルヲ最良ノ作戦方針トス（即決戦主義ヲ高調ス）

（二）列国ガ旧海軍条約ノ比率ニ応ズルナラバ今次拡張ノ要ナキモ現國際情勢並ニ各国ノ現状況ヨリ目下軍縮ノ見込ナク今ニシテ拡張セズンバ拡張全カラズ本拡張ハ何等攻撃的若クハ世界ヲ警備セントスルガ如キ野心ヨリ來ルモノニアラズ若シ然リトセバ本案ノ三倍ノ拡張ヲ必要トス本案実現スルトモ日ニ対シ五対三ニ稍足ラズ（三）米国ガ戦争ニ導カルル可能性アルコト一九一八年以後今日ノ如ク大ナルハナシ

（四）日独伊三国協定ニハ何等カ軍事的意義アリト認ム此ノ点深ク考慮シ置カザルベカラズ（議会説明ニ使用セル

ハーマー・マーク 省 2月4日後着 発  
本

## 特情紐育第四四号

三田ノ「ニヨーヨーク・ブルル・トライビューン」ハ「英米ノ関係」ト題シ英米両国ノ共同動作ニ関シ次ノ如ク論シテ居ル

英米両国ノ前途及利害関係ハ非常ニ似通ツテ居リ又英國ハ仮令海軍拡張ヲ完成シテモ北海、「ライン」ノ前線及地中海方面ニ於テ危険ニ曝サレル虞カアルノテ米国ヲ攻撃スル等ト言フコトハ有リ得ナイソレ故現今ノ様ナ國際的無政府状態ニ於テハ英米両国カ次第ニ接近シテ同盟ヲ結フ様ナ傾向ハ有リ得ルカ「ルーズベルト」政府カ世界ノ侵略國ヲ押ケテ「デモクラシー」ヲ保持スル為ニ英國ト連合スルノハ頗ル非実際的テ米国ニ取り危険ノ多イ遣方タ但シ米国カ英國ノ様ニ同盟ヲ結ンテモ自由ノ外交方針ノ独自性ヲ支持シ得ル様ニナレハ米国ハ戦争ニ引込マレルコトナシニ英國ト連合シ世界ノ最モ強力ナ存在トナルコトガ出来ル

481

昭和13年2月5日

在本邦グル一米国大使より  
広田外務大臣宛建艦問題に關するグル一米国大使よりの申入  
れ

a gun of not more than eight inches) the American Government is limited to a maximum of 8,000 tons with six inch guns.

The Japanese Government has unfortunately not seen its way to subscribe to the London Naval Treaty, nor has it hitherto felt able to give any assurances that Treaty limits would in practice be adhered to by it.

## Excellency:

The Japanese Government will be aware that under the London Naval Treaty 1936 the American Government is precluded from constructing capital ships (i.e., vessels of more than 10,000 tons standard displacement or with a gun of more than eight inches) which exceed 35,000 tons or carry a gun of more than 16 inches, or which are of less than 17,500 tons or carry a gun of less than 10 inches. As regards cruisers (i.e., vessels of not more than 10,000 tons with

又同日ノ「ニヨーヨーク・タイムズ」ハ「外交方針ヲ討論ス」ト題シ中立法ヲ中心ニスル、米國ノ外交問題ニ関シ次ノ如ク論シテ居ル

一、二日付ノ報道ニ依レハ広田外相ハ日支間ニ「戦争状態」カ存在スルト言ツタノコトタカ之丈ケテハ中立法ハ發動サレナイ様タ然シ若シ日本カ本当ニ宣戰ヲ布告シタ場合ハ米国ハ厭テモ応テモ米国自身カ欲シテ居ナイ中立法ノ發動ヲセサルヲ得ナクナルダラウ詰マリ之ヲハ日本政府カ米国ノ外交方針ヲ決定シテ吳レルコトニナル訳タ

11、昨年十一月二十一日ノ英國議会ニ於ケル「イーベン」外相ノ声明及英米両国ノ軍拡案發表ヲ基礎トシテ「ボラ一」カ考ヘテ居ル様ニ世界ノ各国ハ英米両国間ニ何カ秘密協約テモ出来テ居ルラシイト言フ疑念ヲ持ツテ居ル然シ「イーベン」外相ノ言ツタコトハ單ニ英米両国ハ秩序アル安全ノ世界ヲ齎スコトニ共通ノ興味ヲ持ツテ居ルト言フ簡単ナ事実テ英米両国ハ同シ様ナ或ハ「併行シタ」行動テ共通ノ目的ヲ達スルコトカ出来ルノテアル

formity with the above-mentioned limits. The American Government has therefore decided

that it will be necessary for it to exercise its right of escalation unless the Japanese Gov-

ernment can furnish the aforesaid assurances and

can satisfy the American Government that it will not, prior to January 1, 1943, lay down, complete, or acquire any vessel which does not conform to the limits in question, without previously informing the American Government of its intention to do so and of tonnage and calibre of the largest gun of the vessel or vessels concerned.

In view of the forthcoming publication of naval estimates and necessity for giving other Treaty Powers information as to intended American construction, the American Government will be glad to receive a reply not later than February 20 next. Should no reply be received

by that date, or should the reply be lacking in the desired information and assurances, it will be compelled to assume that the Japanese Government either is constructing or acquiring or has authorized the construction or acquisition of vessels not in conformity with the limits referred to. The American Government would thereupon be obliged in consultation with the other Naval Powers with which it is in treaty relations to resume full liberty of action. If, however, the Japanese Government, though engaged in, or intending to engage in, construction not in conformity with treaty limits, were willing to indicate forthwith the tonnages and calibres of guns of the vessels which it was constructing, or was intending to construct, the American Government for its part would be ready to discuss with the Japanese Government the question of the tonnages and gun calibres to be

adhered to in future if Japan were now prepared to agree to some limitation. It would, however, be necessary that such consultation should be completed by April 1.

I avail myself of this opportunity to renew to Your Excellency the assurances of my highest consideration.

Joseph. C. Grew

His Excellency

Mr. Koki Hirota,

His Imperial Japanese Majesty's

Minister for Foreign Affairs,

etc., etc., etc.,

Tokyo.

(欄外記入)

1月廿日午後五時半「ツヤーハ」參事官來省大使病臥中ノ  
趣ハ日本公文ヲ吉沢手交ヤシ其際英伊両大使館ヨリ  
回文ノ公文來ルベキ距ニ遠ニタツ(吉沢印)尚公文ハ華府ニ  
於ル五日正午(日本時間正午前11時)發表ノ由

海軍問題ニ関ベル米国大使申入ニ関ベル書  
翰第八七五号(仮訳)  
以書翰略上致候陳者一九三六年倫敦海軍条約トニ於テ米国  
政府ハ主力艦(即チ標準排水量一万噸ヲ超ヨルカ又ハ八吋  
ヲ超ヨル口徑備砲ヲ有スル艦船)ニ關シ三万五千噸ヲ超  
又ハ口徑十六吋ヲ超ヨル備砲ノ搭載若ハ一万七千五百噸以  
下ナルカ又ハ十時以下ノ備砲ヲ搭載スルヤノノ建造ヲ制限  
ヤハニ巡洋艦(即チ噸數一万噸ヲ超ベス搭載備砲口徑八吋  
ヲ超ケサル艦船)ニ關シテハ六吋備砲ヲ搭載ヤル最大限噸  
數八千噸ニ局限セハシ居ル次第ニ付テハ日本政府ハ御承知  
ノ次第ニ有之候  
日本政府ハ不幸倫敦海軍条約ニ參加セハルノ運ニ至ラバ  
又實際上同條約制限ヲ遵守ベシムノ同等確約ヲ与ベ得  
キニ非ストノ建前ヲ持セラレ候  
前記海軍条約ハ條約不參加國ニ於テ該條約制限ニ從ハサル  
建艦ヲ行フカ如キ場合ニ於ケル「日本カレーシヨン」ノ権  
利発動ヲ米国政府ニ許与シ居ルハ日本政府ノ熟知セラル  
所ニ有之候

日本ニ於テハ上記条約ノ制限ニ合致セサル艦種ノ主力艦及

巡洋艦ノ建造ニ既ニ着手シ又ハ着手スルノ意向ヲ有スル旨  
ノ執拗ニシテ度重ナル報道先般來行ハレ居リ而シテ右報道  
ハ日本政府ニ於テ其ノ事實無根ナル旨明示的確言セラル  
ニ非スンハ信憑セサルヲ得ナル性質ノモノニ有之候依テ米  
国政府ニ於テハ日本政府カ前述ノ確言ヲ与ヘ且一九四三年  
一月一日以前ニ於テハ米国政府ニ対シ其ノ建艦意向並ニ建  
艦噸数及備砲最大口径ニ関シ事前ノ通告ヲ行フロトナクシ  
テハ上記条約ノ制限ニ合致セサル何等艦船ノ起工竣工乃至  
取得ヲ行ハサルヘキ意向ヲ表明シ米国政府ヲ満足セシメ得  
ルニ非スンハ米国政府ハ「ヒスカレーンシヨン」ノ権利行使  
ヲ必要トスルニ到ルヘキコトニ決定致シ候  
海軍予算見積ノ公表並ニ爾余条約調印國ニ対シ米國ノ建艦  
ニ関スル情報ヲ通報スルノ必要切迫シ居ルニ鑑ミ米国政府  
ハ遅クトモニ一月二十日迄ニ日本政府ノ回答ニ接セントヲ  
希望スルモノニ有之右期日迄ニ回答ニ接セサルカ、又ハ回  
答中ニ上記通報及確言ヲ欠除スル場合ニ於テハ米国政府ハ  
日本政府カ前記条約ノ制限ニ合致セサル諸船艦ノ建造乃至  
取得ヲ行ヒツツアリ又ハ之カ建造乃至取得ヲ認許シタルセ  
ノト推定セサルヲ得サル次第ニ候依テ米国政府ハ爾他条約

調印海軍国ト協議ノ後完全ナル行動ノ自由ヲ執ルノ余儀ナ  
キニ立至ル次第ニ有之候然レトモ若シ日本政府ニ於テ上記  
条約ノ制限ニ合致セサル建艦ニ從事シ又ハ從事セントスル  
意向ナリトスルモ直ニ其ノ建艦シツツアリシ若ハ建艦ノ意  
向ヲ有シタル建艦噸数及之カ搭載備砲口径ニ付米国政府ニ  
対シ通報スルノ意向ヲ有セラルニ於テハ米国政府ハ日本  
政府カ現在何等カノ制限ニ同意スルノ用意アル場合ハ将来  
遵守セラルヘキ噸数及備砲口径問題ニ付日本政府ト討議ス  
ルノ用意有之候尤モ右協議ハ四月一日迄ニハ完了セラルル  
ヲ要シ候  
右申進旁々本使ハ茲ニ重ネテ閣下ニ向ツテ敬意ヲ表シ候  
敬具

1938年1月五日

在京米国大使 ジョセフ・リー・グレー  
廣田大臣 閣下

482 昭和13年2月5日 在本邦クレーリー英國大使  
廣田外務大臣宛

建艦問題に關するクレーリー大使よりの申入  
れ

2. The Japanese Government have unfortunately not seen their way to subscribing to the London Naval Treaty nor have they hitherto felt able to give any assurances that Treaty limits would in practice be adhered to by them.

3. As the Japanese Government will be aware the Naval Treaties give His Majesty's Government a right of escalation in the event of building not in conformity with Treaty limits by a Power not a party thereto. There have for some time been persistent and cumulative reports which, in the absence of explicit assurances from the Japanese Government that they are ill founded, must be deemed to be authentic, that Japan has undertaken or intends to undertake construction of capital ships and cruisers not in conformity with the above-mentioned limits. His Majesty's Government have therefore decided that it will be necessary for them to

exercise their right of escalation unless the Japanese Government can furnish the aforesaid assurances and can satisfy His Majesty's Government that they will not, prior to 1st January 1943, lay down, complete or acquire any vessel which does not conform to the limits in question without previously informing His Majesty's Government of their intention to do so and of the tonnage and the calibre of the largest gun of the vessel or vessels concerned.

4. In view of the forthcoming publication of naval estimates and the necessity for giving other Treaty Powers information as to intended British construction His Majesty's Government will be glad to receive a reply not later than February 20th next. Should no reply be received by that date or should the reply be lacking in the desired information and assurances, they will be compelled to assume that the Japanese

tion should be completed by April 1st.

I avail myself of this opportunity to renew to Your Excellency the assurances of my highest consideration.

(Signed) R.L. Craigie.

His Excellency

Mr. Koki Hirota,

H.I.J.M. Minister for Foreign Affairs

(中仮訳)

建艦問題ニ関ヘル英國大使書翰(第一六号)

仮訳

以書翰略上致候陳者日本國政府ニ於テハ千九百三十一年倫

敦海軍条約並右ニ対応セル獨逸國及「ソヴィエト」連邦ヘ

ヘ11國間協定ニ依リ英國政府カ三万五千噸ヲ超過シ若ハ十

六七以上ノ備砲ヲ有シ又ハ一万七千五百噸ニ達セサル若ハ十  
七噸以下ノ備砲ヲ有スル主力艦(即チ基準排水量一萬噸以  
上又ハ八吋以上ノ備砲ヲ有スル艦船)ノ建造ヲ為シ得サル

次第ヲ御承知ノコトニ存候巡洋艦(即チ八吋ヲ超ヘサル備

Government either are constructing or acquiring or have authorized the construction or acquisition of vessels not in conformity with the limits referred to. His Majesty's Government would therefore be obliged, in consultation with other naval Powers with whom they are in treaty relations, to resume full liberty of action. If however the Japanese Government, though engaged in or intending to engage in construction not in conformity with the treaty limits, were willing to indicate forthwith tonnages and calibres of guns of vessels which they were constructing, or were intending to construct, His Majesty's Government for their part would be ready to discuss with the Japanese Government the question of the tonnages and gun calibres to be adhered to in the future if the Japanese Government were now prepared to agree to some limitation. It would however be necessary that such consulta-

砲ヲ有スル一萬噸ヲ超ケサル艦船)ニ関シテハ英國政府ハ最高八千噸備砲六吋ノ制限ヲ受ケ居リ候

11' 日本国政府ハ不幸ニシテ倫敦海軍條約ニ加入セハル

「ハバヌ且又今日迄條約制限ヲ事實上遵守ヘル旨ノ如何ナル保障ヲヤシハラナリシ次第ニ有之候」

11' 日本国政府ニ於テ御承知ノ如ク英國政府ハ海軍諸條約

ニ依リ同條約ノ締約國ナラサル一國カ條約制限ニ従ハサ

ル建造ヲ為ス場合「ハバカノーシヨハ」」権利ヲ与ベハ  
ノ居候昨日本ハ上記制限ニ従ハサル主力艦及巡洋艦ノ

建造ニ着手セリ乃至ハ着手スル意向ヲ有スル旨ノ執拗且  
累次ノ報道有之候處日本國政府ヨリ右カ事實無根ナル旨

ノ明白ナル保障無之場合右ノ報道ハ權威アルモノト看做

サニサルカラサル可ク、依而英國政府ハ日本國政府ニ

於テ上記ノ保障ヲ提供シ得ス且予メ英國政府ニ對シ其ノ

意向並當該艦船ノ噸數及最大備砲ノ口径ヲ通報スルコト

無クシテハ千九百四十三年一月一日以前ニ本件制限ニ従

ハサル如何ナル艦船ヲヤ起工、竣工又ハ取得セサルヘシ

ニヘ点ニ付英國政府ニ満足ヲ与ベラサルニ於テハ其ノ「ハバカレーンコハ」」権利ヲ行使ヘルコト必要ナリト

ノ決定ニ達シタル次第ニ有之候

四、海軍予算見積書ノ発表ヲ控ヘ居ルコト並ニ他ノ締約國

ニ対シ英國ノ建造計画ニ関スル情報ヲ与フルノ必要ニ鑑

「英國政府トシテハ11月11十日迄ニ回答ヲ受領スルヲ得

ハ幸甚ト存候、若シ右期日迄ニ何等ノ回答ヲ受領セサル

場合又ハ回答中ニ所要ノ情報及保障無キ場合英國政府ハ

日本國政府カ前頭制限ニ従ハサル艦船ヲ建造乃至取得中

ナルカ又ハ右ノ建造乃至取得ヲ許可シタルモノト看做サ

サルヲ得サル可ク候英國政府ハ然ル後其ノ条約關係ニ在

ル他ノ海軍國ト協議ノ上完全ナル行動ノ自由ヲ恢復セサ

ルヲ得サルニ立至ル可ク候乍然若シ日本國政府ニシテ條

約制限ニ従ハサル建造ニ従事シ又ハ從事セントスル場合

ト雖モ其ノ建造シツツアリ又ハ建造セントスル艦船ノ噸

數及備砲口徑ヲ遲滯ナク指示スルコトヲ肯ヤハルルニ於

テハ英國政府トシテヤ日本國政府カ何等カノ制限ニ同意ノ

用意アル場合将来遵守サルベキ噸數及備砲口徑ノ問題ニ

付同國政府ト協議スル用意有之候尤モ右ノ如キ協議ハ四

月1日迄ニ完了ベルコト必要ナルベク候

本使ハ閣下ニ向テ茲ニ重ネテ敬意ヲ表シ候

敬具

483

昭和13年2月5日  
廣田外務大臣

在本邦アハニ一仏國大使ニ

建艦問題正圖ハコーネ國大使よりの書

入れ

「ローバー・ケンチャード」

昭和13年2月5日  
廣田外務大臣宛

le 5 février 1938  
Ambassade  
de la  
République Française  
au  
Japon

Monsieur le Ministre,

Le Gouvernement Japonais n'ignore pas qu'aux termes du Traité naval de Londres de 1936, complété par les arrangements bilatéraux conclus par la Grande-Bretagne avec l'Allemagne et

l'U.R.S.S., le Gouvernement de la République ne peut construire de navires de ligne (c'est-à-dire de plus de 10,000 tonnes de déplacement type ou portant un canon d'un calibre supérieur à 203 millimètres):

a)-dépassant 35,000 tonnes de déplacement ou portant un canon d'un calibre supérieur à 406 millimètres;

ou b)-ayant moins de 17,500 tonnes de déplacement ou portant un canon d'un calibre inférieur à 254 millimètres.

En ce qui concerne les croiseurs (c'est-à-dire les bâtiments dont le déplacement ne dépasse pas 10,000 tonnes et qui ne portent pas de canons d'un calibre supérieur à 203 millimètres) le Gouvernement de la République est limité à un déplacement de 8,000 tonnes et à un calibre de 155 millimètres.

Le Gouvernement Japonais n'a malheureuse-

ment pas cru possible de souscrire au Traité naval de Londres et ne s'est pas jusqu'à présent senti en mesure de fournir l'assurance qu'il observerait en pratique les limites fixées par ce Traité.

Le Gouvernement Japonais sait qu'aux termes de ce Traité le Gouvernement de la République a le droit de faire jouer une clause de sauvegarde dans le cas où une puissance non partie au traité entreprendrait des constructions non conformes aux limites fixées par celui-ci.

Dans ces conditions le Gouvernement Français ne saurait ignorer des bruits qui, n'ayant pas fait l'objet d'un démenti de la part du Gouvernement Japonais, semblent devoir être admis comme fondés et d'après lesquels le Japon aurait entrepris ou aurait l'intention d'entreprendre la construction de navires de ligne ou de croiseurs dont les caractéristiques seraient supé-

rieures aux limites sus-mentionnées.

Le Gouvernement Français se rend compte que dans cette éventualité et pour des raisons qu'il apprécie pleinement il serait sans doute impossible aux puissances qui ont signé avec lui le Traité de Londres de ne pas recourir à la clause de sauvegarde et qu'il se trouverait ainsi lui-même conduit à s'affranchir de limites qu'il espérait avoir été définitivement fixées.

Le Gouvernement Japonais comprendra donc certainement que le Gouvernement Français ait le désir d'apprendre du Gouvernement Impérial lui-même quelles sont ses intentions et surtout s'il serait disposé jusqu'au 1er Janvier 1943 à prévenir le Gouvernement de la République des constructions qu'il se proposerait de mettre en chantier et dont les caractéristiques de tonnage ou de calibre ne seraient pas conformes aux limites du Traité de Londres.

tions à venir.

Veuillez agréer, Monsieur le Ministre, les assurances de ma très haute considération.

(Signé) Charles Arsène Henry

Son Excellence

Monsieur Koki Hirota

Ministre des Affaires Etrangères

etc, etc, etc, TOKYO

(扣板論)

建艦題(閣ベル仏國大使書翰(第五号)仮記

以書翰啓上致候陳者日本國政府ニ於テハ英國ト独逸国及

「ハセマヒ」連邦ヘニ国間協定ニ依リ補足ヤハルル千  
九百三十六年倫敦海軍条約ニ依リ仏國政府カ(レ)噸数三万五  
千噸ヲ超過シ若ハ口徑四〇六「ミリメートル」以上ノ備砲

ヲ有シ又ハ(レ)噸数ハ一万七千五百噸ニ達セサル若ハ口徑11

五四「ミリメートル」以上ノ備砲ヲ有スル主力艦(即チ基

準排水量1万噸以上又ハ口徑110mm「ミリメートル」以上  
ノ備砲ヲ有スル艦船)ノ建造ヲ為シ得サル次第ヲ御承知ノ

會議脱退後における諸交渉

Le Gouvernement de la République attachera du prix à être informé le plus tôt possible de la réponse du Gouvernement Japonais sur ce point; faute de quoi il se verrait contraint d'entrer en consultation avec les autres puissances liées par le Traité de Londres pour envisager la reprise de liberté d'action de chacun des intéressés dans le domaine des constructions navales.

Au surplus si le Gouvernement Japonais, qu'il ait entrepris ou qu'il ait l'intention d'entreprendre des constructions non conformes aux limites du Traité de Londres, était disposé à faire dès maintenant connaître les déplacements et calibres adoptés pour les bâtiments en construction ou en projet, le Gouvernement de la République serait prêt, pourvu que le Gouvernement Japonais y fut également disposé, à entrer en conversation avec lui en vue de fixer les limites de tonnage et de calibre à adopter pour les construc-

超ヨル備砲ヲ有セサル一萬噸ヲ超ベサル艦船)ニ閣シトハ

仏國政府ハ噸數八千噸口徑六吋ノ制限ヲ受ケ居リ候

日本國政府ハ不幸リシト倫敦海軍条約ニ加入ヤハルルニ至

ラス且又今日迄同条約制限ヲ事實上遵守スル事ノ保障ヲ与

ヘハルルニキ程ハサリシ次第ニ有之候

日本國政府ニ於テ御承知ノ如ク仏國政府ハ同条約ニ依リ同

条約ノ締約國ナラサル一國カ同條約ノ制限ニ従バサル建造

ヲ為ス場合免除条項ヲ發動セシムルノ権利ヲ与ヘラシ居

候從テ仏國政府ハ日本政府側ヨリ打消ナキヲ以テ根拠アル

モノト看做サルベキヤニ認メラル日本カ上記制限ヲ諸要

点ニ於テ超過ヤル主力艦及巡洋艦ノ建造ニ着手セリ乃至着手

スルノ意向ヲ有スル旨ノ報道ニ無関心タルヲ得サル次第

ニ有之候

仏國政府ハ右可能性ノ下ニ於テ充分了解シ得ハル理由ノ下

ニ仏國ト共ニ倫敦条約ヲ締結セル諸國ニテ免除条項ニ訴

ヘサルコトカ恐ク不可能ナルベキコト従テ仏國自身モ最後

的ニ決定セラシタルモノナル事ヲ期待シ居リタル制限ヲ超

過スルノ口ムナキニ立至ルベキ事ニ思考スルモノニ候

日本國政府ニ於テハ仏國政府カ日本政府自身ヨリ其ノ意向

ヲ承知シタキ希望ヲ有スル事且予メ仏国政府ニ対シ千九百四十三年一月一日以前ニ噸数及口径ノ要目ニ関シ倫敦条約ノ制限ニ從ハサル艦船ヲ起工セントスル場合ニ予メ通報セラルノ用意アリヤヲ承知シタキ希望ナル事了解セラル

コトト存候

仏国政府ハ成ルヘク速ニ此ノ点ニ関スル日本政府ノ回答ヲ得レハ幸甚ト存候御回答ニ接セサル場合ハ倫敦条約ニ依リ結ハル他ノ諸国トノ間ニ軍艦建造ニ関スル各自ノ自由恢復問題ヲ考究ノ為協議スルヲ余儀ナクセラルヘク候

乍然若シ日本政府ニシテ倫敦条約ノ制限ニ從ハサル建造ニ従事シ又ハ従事セントスル場合ト雖モ其ノ建造シツツアリ又ハ建造セントスル艦船ノ噸数及備砲口径ヲ今ヨリ指示スルノ用意アルニ於テハ仏国政府トシテモ日本政府カ同様ノ用意アル場合将来ノ建造ニ付遵守サルヘキ噸数及備砲口径ヲ決定スル為同国政府ト討議スル用意有之候本使ハ閣下ニ向テ茲ニ重ネテ敬意ヲ表シ候

昭和十三年二月五日

「シャルル・アルセーヌ・アンリー」

広田外務大臣閣下

カ又ハ四月一日迄ノ協議ニ引込マルノ惧アレハ上述ノ通り唯軽ク受流シ置クヲ賢策ト思考ス

英、米ヘ輸電シ独、伊ヘ暗送セリ

485 昭和13年2月7日

在米国斎藤大使より  
広田外務大臣宛(電報)

### 海軍問題に関する米国政府の公文に対する回

答につき意見具申

ワシントン 2月7日後発  
本 省 2月8日前着

第六八号(極秘)館長付号扱

貴電第四号海軍問題ニ関スル米国公文ニ対スル回答振ニ付テハ折角御考慮中ノコトト拝察スル處本件公文發出ノ事情ヲ想像スルニ一九三六年倫敦条約ノ「エスカレーター」条項適用ノ關係アルハ勿論ニシテ曩ニ往電第四六号「インガソル」大佐渡英、英米間相談ノ結果トハ認メラルモ他方目下当國議会ニ提出中ノ海軍拡張案ニ関連シ議会内外ニテ右ハ攻撃的意図ニ出ツルモノニアラスヤト疑ヒ之ニ反対シ居ル者ノアル事情ニ鑑ミ米国ハ此ノ際何等攻撃的意図ヲ有セス日本側ノ措置ノ為海軍拡張ノ已ムヲ得サルニ至レ

484 昭和13年2月7日

在仏国杉村大使より  
広田外務大臣宛(電報)

### 建艦問題に関する英米からの申入れに対する

我が方回答につき意見具申

パリ 2月7日後発  
本省 2月8日前着

第六八号(極秘)

貴大臣発英宛電報第四三号ニ関シ(建艦問題ニ関スル英米申入ノ件)英米側ノ真意ハ各国防ノ安全ヲ期セントスルニ存スヘキモ本来翰ノ文句ニ照スニ我答弁次第ニテハ我ニ軍備競争ノ全責任ヲ負ハシメントスルカニ察セラレ不都合ト認メラルモ目下ノ時局ニ鑑ミ我方トシテハ條約上ノ問題ヲ離レ单ニ友誼的ニ答弁スル旨ヲ明カニセラレタル上既往ニ於テ制限外ノ計画ヲ樹立セルコトナク将来ニ對シテモ不脅威、不侵略ノ方針ヲ堅持スヘキモ唯國際情勢ノ変化ニ応シ臨機措置ノ要モアレハ計画ヲ言明シ難キ旨輕ク答弁セラルコト大局上然ルヘキヤニ存セラル

尚此ノ際量的制限ヲ閑却シ乍ラ質的制限ノミヲ協議シ得サル旨云々ノ我主張ヲ繰返サルハ徒ニ事態ヲ紛糾セシムル

ル所以ヲ明カニシ以テ海軍拡張競争誘致ノ責任ヲ日本側ニ転嫁シ當國海軍拡張ニ對スル反対論ヲ緩和セントスル意図ニ出ツルモノアルヤニモ観察セラル(六日國務省長官カ「ラヂオ」演説ニ於テ米国ハ何時ニテモ各國ト協力シ軍縮実現ノ為努力スルノ用意アルコト及當國ノ海軍拡張ハ防禦的ノモノナルコトヲ強調シタルコトモ其ノ間ノ事情ヲ反映スルモノカト存セラル)就テハ從来ノ經緯ニモ鑑ミ本件米國公文ニ對シ我方カ否定的回答ヲ發出スルコトナルモ已ムヲ得サルヘク又當國一般ニ於テモ大体ニ於テ日本ノ否定的回答ヲ予想シ居リ從ツテ之カ為特ニ一般輿論ヲ刺戟スルコトナカルヘシト存セラルモ本件ニ關スル日本ノ措置振如何ニ依リ一般輿論ヲシテ當國海軍拡張ニ有利ニ展開セシムルコトハ出來得ル限り之ヲ防止スルノ要アリト思考スルニ付本件ニ對スル回答ト同時ニ例へハ日本ハ從來累次声明シ居ル如ク不脅威、不侵略ノ方針ヲ堅持シ公正妥当ナル軍艦ノ達成ニ賛成ナルコトニハ何等變リナク主力艦、航空母艦ノ如キ攻撃的武器ノ廃止ニモ賛成シ居ルモノナルカ各國ニ於テ此ノ日本ノ合理的要望ヲ認メサル為遺憾乍ラ未タ軍縮ノ實現ヲ見ルニ至ラサル訳ナリ軍縮ノ行ハレサル今日現

在ノ如キ劣勢ナル日本ノ海軍力ヲ以テシテ優勢ナル外國ノ

海軍力ニ対抗スル為ニハ建艦計画ヲ秘密トスルコトハ唯一  
ノ武器ニシテ又已ムヲ得サル次第ナルコト等ヲ明カニスル

コト時宜ニ適スト存ス

以上当方ヨリノ観測御参考迄(当地新聞ニ於テモ此ノ際日

本側ニ於テ攻撃的武器ノ廃止ヲ提議スルカ如キコトアラハ  
当國ノ議會内外ニ於ケル孤立主義者乃至平和主義者ノ海軍

拡張ニ対スル反対論ニ拍車ヲ掛ケルコトナナルヘキ眞報道  
シ居レリ)

紐育ヘ託送シ英ヘ転電セリ英ヨリ仏ニ転電シ独、伊、蘇ヘ  
郵送アリタシ

~~~~~  
在米国齋藤大使より

486 昭和13年2月7日 広田外務大臣宛

米國の國防及び經濟政策に關するハル國務省  
直のハシタ放送ニハレ

(3月3日接受)

第1〇一號 昭和十三年1月七日 在米

487 昭和13年2月12日 広田外務大臣より 在本邦グル一米國大使宛

特命全權大使 斎藤 博 (印)

外務大臣 広田 弘毅殿

米國ノ国防及經濟政策ニ關スル國務長官ノ

「ラヂオ」放送ニ關シ報告ノ件

「ハル」國務長官ハ二月六日左記要旨ノ「ラヂオ」放送ヲ  
全米ニ向ケ行ヒタルカ右放送「テキスト」及新聞記事別添

報告申進ス

記

一、軍拡カ悲シムヘキ事実トシテ存在スル今日米國トシテ  
モ其ノ軍備ヲ充分ナラシムルノ必要ニ迫ラレツツアルモ

軍備縮少ニ対スル國際的協調ニハ何時ニテモ欣然參加ス  
ルノ用意ヲ有スルモノナリ

11、大戰後ニ生シタル經濟戰爭コソ國際平和攪亂ノ主要原  
因ナリ人類ノ恒久平和ハ經濟的安定ヲ基調トセル法秩序  
ノトニ於テノベ始メテ期待シ得ヘク米國ハ世界ノ經濟的  
安定達成ノ第一歩トシテ列國ト互惠通商協定ノ締結ニ邁  
進ヤリ今日迄締結シタル十六個ノ互惠協定ノ成果ヲ見ル  
ニ一九三七年度ノ米國ノ協定國ニ対スル輸出ハ非協定國  
ニ対スル夫レニ比シ一段ノ躍進ヲ見タリ最惠國条款ニ依

ル互惠ノ拡大ハ徒ラニ輸入超過ヲ來ステフ批難ヤ一九三  
七年度ニ於ケル輸出ノ輸入ニ対スル圧倒的激増ヲ見ニハ  
容易ニ其根拠ナキヲ知ルヘン也々

487 昭和13年2月12日 広田外務大臣より 在本邦グル一米國大使宛

庚謹體諒ニ鑑テハ日本政府の方意立つ所回照

Your Excellency,

I have the honour to acknowledge the receipt  
of Your Excellency's letter No. 875 dated 5th  
February, 1938, in which you set forth your  
Government's desire regarding the communica-  
tion of information on the matter of naval  
construction.

carriers, which are aggressive in their nature, and  
at the same time urged that qualitative limitation,  
if not accompanied by quantitative limitation,  
would not be calculated to achieve any fair  
measure of disarmament. Unfortunately the views  
of the Japanese Government were not shared  
by your Government and the other Governments  
concerned. This fundamental principle enter-  
tained by the Japanese Government was, as the  
British Government will be aware, made clear  
again last year in their reply to the proposal of  
your Government regarding the limitation of gun  
calibres. The Japanese Government, always  
prompted by the spirit of non-menace and non  
-aggression, have no intention whatever of pos-  
sessing an armament which would menace other  
countries. At this juncture, when, as a result  
of the non-acceptance by other countries of the  
reasonable desires of Japan in the matter of

disarmament, there is as yet in existence no fair disarmament treaty to which Japan is a party, the Japanese Government are of opinion that the mere communication of information concerning the construction of vessels will, in the absence of quantitative limitation, not contribute to any fair measure of disarmament and regret that they are unable to comply with the desire of your Government on this point.

The Japanese Government fail to see any logical reason in an assumption on the part of your Government that this Government must be deemed to entertain a scheme of constructing vessels which are not in conformity with the limits provided in the London Naval Treaty of 1936 from the mere fact that they do not despatch a reply giving the desired information; and they are of opinion that it is not a matter which should concern this Government if your

Government, on the basis of whatever reason or rumour, should exercise the right of escalation provided in any treaty to which Japan is not a party.

Your Government are good enough to intimate that should the Japanese Government hereafter be prepared to agree to some limitation in respect of the tonnage of vessels and the calibre of guns they would also be prepared to discuss the matter. The Japanese Government still holding the firm conviction that qualitative limitation, if not accompanied by quantitative limitation, would by no means contribute to the attainment of any fair measure of disarmament, cannot but consider that the discussion suggested by your Government would not conduce in any measure to the realisation of their desires concerning disarmament. It is to be added, however, that as the Japanese Government do

not fall behind other Governments in their ardent desire for disarmament, they will be ready at any moment to enter into any discussions on the matter of disarmament which gives primary importance to a fair quantitative limitation.

I avail myself of this opportunity to renew to Your Excellency the assurance of my highest consideration.

(右訳記)

米一普通第一八号

以書翰啓上致候陳者建艦通報ニ関ヘル貴国政府ノ希望御開示相成タル本月五日付貴翰第八七五号閲悉致候

帝国政府ハ過般ノ倫敦海軍々縮會議ニ於テ海軍々備ノ徹底的縮少実現ヲ期シ攻撃の性能ヲ有スル主力艦及航空母艦ノ全廃ヲ提議シタルノミナラス量的制限ヲ伴ハサル質的制限カ何等公正ナル軍備縮少ノ目的ヲ達成スル所以ニ非サルヲ主張シタルセ不幸ニシテ右帝國政府ノ意図ハ貴国政府及他

會議脱退後における諸交渉

会議脱退後における諸交渉  
5 ハ關係國政府ノ了解スル所トナリサリシ次第ナルカ右帝國

政府ノ根本方針ハ客年備砲制限ニ関スル貴國ノ提案ニ対スル我方ノ回答中ニ於テヤ明カニシ置キタルコト御承知ノ通ニシテ帝国政府ニ於テハ飽ク逆不脅威不侵略ノ精神ニ従ヒ何等他國ニ脅威スルカ如キ軍備整備ノ意図ヲ有セサル次第ニ有之候

帝国政府ハ軍備縮少ニ関ヘル我方ノ合理的要望力他諸國ノ賛成ヲ得サル為ニ尚帝国ノ加盟セル公正ナル軍縮条約ナキ現状ニ於テハ量的制限ヲ伴ハサル建艦通報カ何等公正ナル軍備縮少ニ貢献スル所以ニ非ストノ見解ヲ持スルヲ以テ乍遺憾建艦通報ニ關ヘル貴国政府ノ御希望ニ副ヒ難キ次第ニ候

帝国政府カ建艦通報ニ關シ貴国政府ノ要望スルカ如キ回答ヲナササルノ故ヲ以テ貴方ニ於テ我方ニ一九三六年倫敦海軍条約ノ制限ヲ超ユル艦艇ノ建造計画アルモノト推定スルカ如キハ何等ノ合理性ヲ認メ得サル所ニ有之貴国政府カ如何ナル理由乃至風説ヲ根拠トシテ帝国ノ加盟セサル条約中ノ「ハスカレーヌ」ノ権利ヲ行使セラルトモ右ハ全然我方ノ関知セサル所ニ候

ノ制限ニ同意ノ用意アル場合ハ貴国政府ニ於テモ討議ノ用意アル如御申越相成タル処帝國政府ハ量的制限ヲ伴ハサル質的制限ハ公正ナル軍備縮少ノ実現ニ貢献スルモノニ非ストノ從來ノ見解ヲ今日尚堅持スルモノニ有之從テ御申出ノ

如キ協議ハ何等軍備縮少ニ関スル帝國政府ノ希望実現ニ資スル所無之モノト認メサルヲ得ス但シ帝國政府ハ軍縮ニ関スル熱意ニ於テ他ニ劣ルモノニ非ルヲ以テ公正ナル量的制限ヲ第一義トスル軍備縮少ノ協議ニ関シテハ何時ニテヤ久ニ応スルノ用意アル事ヲ茲ニ申添候

右回答申進旁本大臣ハ茲ニ重ネテ閣下ニ向テ敬意ヲ表シ候

右回答申進旁本大臣ハ茲ニ重ネテ閣下ニ向テ敬意ヲ表シ候

昭和十三年二月十二日 敬具

外務大臣 広田 広毅

亞米利加合衆国特命全權大使

「ジニアヤフ・クラーク・グルー」閣下

488 昭和十三年二月十二日 広田外務大臣より  
在米國齋藤大使宛（電報）

海軍問題に關し我が方回答文を手交の際のべ

ル一大使と堀内次官との会談」について

本省 2月12日10時30分発

第四五号（極秘）

往電合第五一九号ニ関シ

堀内次官ヨリ「グルー」大使ニ我方回答文ヲ手交シタル際「ク」ハ本回答ニヨリ日本ノ立場ハ明瞭トナレリ但シ英米ニ於テハソノ希望セル如キ日本側回答ヲ得ル能ハサリシニ依リ夫々「ログラム」ノ変更ヲ企テザルヲ得ザルベク從テ責任ハ日本ニ帰スルロトメナルベシト述べタルニ対シ堀内ハ我方ノ「アーキコメンツ」ハ本回答中ニ明示シアル通ニシテ帝國将来ノ方針ハ同公文末段ノ通りナリト説明セル

「ク」ハ此ノ点ハ頗ル「インターンシング」ナルヲ以テ本国く報告ノ際特ニ注意ヲ喚起スベシト語レル趣ナリ英仏へ転電アリタハ

489 昭和十三年二月十二日

建艦問題に關する日本政府声明

セイ 11月十一日付建艦通報に關する英、米、仏の通牒に対する回答に關し日本政府声明案（外務省）

11 11月九日付同右（海軍省）

Statement of the Japanese Government concerning the question of naval construction.

February 12, 1938.

On the occasion of despatching Notes to the Governments of Great Britain, the United States and France in reply to their Notes concerning the communication of information on naval construction, the Japanese Government wish to make their settled convictions generally known both at home and abroad.

The basic attitude of this Government toward the disarmament problem was fully elucidated at the last London Naval Conference. The Japanese Government at that time made clear to the world their conviction that a really fair reduction of armament could not be achieved

会議脱退後における諸交渉

except by way of effecting a quantitative limitation and that the mere qualitative limitation or the exchange of information concerning naval construction would not only fell far short of what is necessary in order to achieve the desired disarmament, but, on the contrary, would create a tendency to make up for deficiencies in quality by quantitative augmentation thereby leading inevitably to a naval competition in respect of quantity. The Japanese Government do not see any reason today to alter this conviction of theirs.

The fundamental principle of Japan's naval construction, as has been stated on many previous occasions, has been and still is based on the principle of non-menace and non-aggression; i.e., the Japanese Government do not hesitate to declare on this occasion that they simply aim at possessing an armament which is

adequate for the defence of their own country, and it is far from their thought to possess an armament which would be likely to be a menace to other countries. At the present moment, however, when there exists no fair and equitable disarmament treaty, we believe that it will readily be understood that Japan, trying, as she is, to ensure the security of her national defence with an armament small in comparison with those of such great naval Powers as Great Britain and the United States, cannot afford to disclose her plans of naval construction in compliance with the desire of those three countries.

Recently Great Britain has, with considerable cause of apprehension to other countries, embarked upon a colossal armament programme, and the United States appears also to be on the point of following a similar course. It cannot

in order to cope with that construction. As Japan falls behind no Power in the fervent desire for the realization of such fair reductions of naval armament as will contribute to the promotion of peace and amity throughout the world, she hereby desires to assure the nations concerned that she is at all times quite prepared to discuss with them any plan for disarmament which attaches primary importance to quantitative limitation; and she would invite careful consideration of the subject by all who are really devoted to the cause of world peace.

(乙 図1)

建艦通報ニ關ヘル英、米、仏ノ通牒ニ対ベル  
回宛ニ懸シ帝国政府相照案(昭和11年)11

11)

諸交渉における脱退後会議

茲ニ建艦通報ニ關ヘル英、米、仏ノ通牒ニ対ベル  
答ヲ發スベリ既リ、帝国ノ所信ヲ広ク申外ニ闡明ヤハ  
ケ。

be considered fair on the part of the three Powers that, in the face of such an expansion of armaments in many countries including their own, they should by their recent Notes desire the disclosure of the extent of the Japanese naval programme and should take up the position that in case Japan should fail to meet with their desire they would dogmatically conclude that Japan must be constructing vessels not in conformity with the limits introduced by treaties to which Japan has never been a party, and that they should make it the reason for their armament expansion. Responsibility for any future development must therefore be borne by the leading naval Powers themselves. Japan would regret it profoundly if these Powers should undertake still more extensive armament construction on such grounds, thereby leaving Japan no alternative but to alter her building plans

邦々軍縮問題ニ対ヘル帝国ノ根本的態度ハ過般ノ倫敦軍縮會議ニ於テ續々強調ヤル所ニシテ真ニ公正ナル軍縮目的ヲ達成ヤハシキ先づ量的縮限ノ斷行ヲ措イテ他ニ途ナク彼ノ單ナル質的縮限若クハ建艦通報ノ如キヲ以トシテハ到底其ノ目的ヲ達ベルロム能ハズ却テ量ヲ以テ質ノ不足ヲ補ハシベルノ傾向ヲ認致シ徒ニ量的建艦競争ヲ招来スベキコト必然ナル所以ハ天下ニ明カニヤリ。右帝国政府ノ所信ハ今田海内ヲ翻ベキ事等ノ理由ヲ有ヤカ。

而シテ帝国海軍軍備整備ノ根本方針ハ累次明カリヤル如ク飽ク迄不脅威不侵略ノ信条ニ則ルニ在リ、即チ帝国ハ自ラサルニ足ルベキ軍備ヲ以テ由途ニ為シ敢テ他國ニ脅威ヲ与フルガ如キ軍備ヲ整備スルノ意図ハ現在ニ於テハ勿論将来ト雖モ毫モ之ヲ有ヤサルズキハ茲ニ明言シテ憚ラザル所ナリ。然レニヤ英米ノ如キ最大海軍國ニ比シ寡少ナル軍備ヲ以テ国防ノ安固ヲ期シツツアル帝国ニシテハ公止妥当ナル軍縮協定ノ存在セヤル今田川國ノ要望ニ応シテ我建艦計画ノ内容ヲ開示スルガ如キハ到底恐バカラザル所ナルハ何人モ之ヲ了解スルニ難カラザルヲ信ベ。

翻テ列国軍備ノ趨勢ヲ觀ルニ最近英國ニ於テハ既ニ膨大ナ



持スルニ足ル海軍力ヲ維持スルヲ目的トシ何等侵略意図ヲ有セサルコト

二、将来新ナル海軍々縮協定締結セラルル場合ニハ右協定保有量内ニ止ムル為協賛済艦船ノ建造ヲ右程度迄停止ス

ル権限ヲ大統領ニ付与スルコト（但シ本法成立當時既ニ建造中ナルモノヲ除ク）

英ニ転電セリ英ヨリ仏、伊、独、蘇ニ転報アリタシ

491 昭和13年2月14日 在ニュー・ヨーク若杉總領事より  
広田外務大臣宛（電報）

### 海軍問題に関する我が方拒絶回答に対する米

#### 国新聞論調について

海軍問題について  
ニュー・ヨーク 2月14日後発  
本 省 2月15日前着

第五三号

海軍問題ニ関スル我方拒絶回答ハ十三日朝刊各紙ニ大々的ニ報セラレ各紙ハ一齊ニ之ニ関シ論説ヲ掲載シ居ル處大体

ノ議論ノ主流ヲ綜合スレハ東京回答ハ外交的辞令ヲ剥ケハ建艦競争モ是レ辞セス日本ノ從来ノ主張タル「パリティ」

ノ責任ヲ負ハサルルノ不利ハ別トシテ日本自身ニ取り不幸ナル事態ヲ招来シタリト言フヘシ云々

委細特情参照アリタシ

米ヘ転電セリ

492 昭和13年2月14日 在米國斎藤大使より  
広田外務大臣宛（電報）

海軍拡張に反対のフィッシュ下院議員の意見について  
ワシントン 2月14日後発  
本 省 2月15日前着

第八二号

往電第八〇号ニ関シ  
十四日紐育州選出下院議員「フィッシュ」（徹底的孤立主

ヲ容ルレハ相談ニハ乗ルヘシト謂フニ在リ予期シタル所トハ言ヘ聊カモ協調的傾向ヲ示ササリシハ失望セサルヲ得ス

日本回答ハ米國ヲシテ最早軍拡以外ニ執ル途ナキヲ悟ラシメ政府ノ軍拡計画ニ対スル国内反対論ヲ弱ムヘン然レトモ

日本ハ建艦競争ニ於テハ日本ノ経済力ハ最モ「バルネラブル」ナルヲ悟ルヘキニシテ此ノ回答ニ依リ日本ハ軍拡競争

ノ責任ヲ負ハサルルノ不利ハ別トシテ日本自身ニ取り不幸ナル事態ヲ招来シタリト言フヘシ云々

委細特情参照アリタシ

米ヘ転電セリ

ワシントン 2月14日後発  
本 省 2月15日前着

第一二五号（極秘、館長符号扱）

十五日求メニ依リ「イーデン」外相ヲ往訪「イ」ハ直ニ貴電合第五一九号帝国政府回答ニ言及シ未タ充分ニ研究ヲ終

リ居ラサルモ右回答ニ接シ甚タシク失望ヲ禁スル能ハス何レノ海軍国モ建艦競争ヲ希望セサルハ明カナルカ此ノ儘ニ

テハ建艦競争ノ端ヲ開クノ惧アリトテ極度ニ困惑シ居ル次第ヲ頻リニ繰返セリ依テ本使ハ帝国政府ハ從来國民ニ対シ

ノ手前逆戻リスルカ如キ措置ニ出ツルコトハ到底不可能ナリシナルヘク且又本件ハ一昨年来ノ懸案ニテ帝国政府ノ主

張ハ英國側ニ充分明カナル筈ナリ然ルニ突然公文ヲ送り出

サレタル事情ハ承知セサルモ貴國側カ希望セラルカ如キ

回答ヲ得ラセサリシハ寧ロ当然ト思ハルト言ヘルニ「イ」

ハ尽ス丈ケノ手段ハ之ヲ尽シ來レルモ遂ニ已ムヲ得ス茲ニ

至レリト種々弁解セルニ付本使ハ帝国海軍ノ計画ニ付テハ

何等承知スル所ナキカ故ニ本件其ノモノニ関シテハ何等容喙スヘキ立場ニアラサルモ貴大臣ノ困却セラルル次第ハ早速帝国政府ニ取次クヘク特ニ申添フコトアラハ承知シ度シト言ヘルニ外相ハ兎モ角モ貴国政府ノ好意アル考慮ヲ希望ストテ何分ノ配慮ヲ請フ旨ヲ率直ニ申出テタリ

尚本件ニ付テハ英側ノ立場モ研究ノ上近日中ニ私見申進スヘシ

米、仏ニ転電セリ

494 昭和13年2月16日 在米国斎藤大使より  
広田外務大臣宛(電報)

日本の対米比率引上に關するルーズヴェルト

大統領の記者会見等の報知

ワシントン 2月16日後発  
本 省 2月17日後着

第八七号

往電第七五号ニ閲シ

一、大統領ハ十五日新聞記者会見ニ於テ日本ノ対米比率引上ニ反対ナリヤトノ質問ニ答ヘ米ハ他国ニ対スル比率如何ニ拘ラス大西太平両岸ヲ防備スルニ足ル艦隊ヲ必要ト

付米国公文ニ対スル)ニ対スル米国側反響ノ件)

(一)新聞記者会見ニ於ケル問答速記録別電ノ通りニシテ(当

局ヨリ内密入手セルモノ)國務長官ノ用語ハ極メテ漠然タルモ少クトモ當時ノ空氣ニテハ本件ハ一段落ナリトノ印象ヲ与ヘタル趣ナリ

(二)當時建艦計画ニ対スル我方回答及新嘉坡要塞完成式問題カ一般ノ関心ヲ奪ヒタル折柄ナリシ為「ニヨーヨーク・タイムズ」カ单ニ本件我方回答全文ヲ掲ケ其ノ他各紙

右ヲ略報シタル以外前記「ハル」長官ノ談話サヘ報道シ居ラス又特ニ何等論評等ヲ加フルモノナカリシ次第ナリ(別電)

Washington, Feb. 26, p.m.

Received, Feb. 27, a.m., 1938.

Gaimudaijin, Tokio.

No. 108 (Betsuden)

Question—Do you regard as satisfactory the Japanese note?

Answer—I don't think that I have anything new or additional to offer more than what

スルコトヲ考慮ニ入レ置ク要アル次第ニテ何レカ一方ノ大洋ノ防備ノミニ頼リ得サルコトハ海軍問題ヲ熟知スル者ノ一致ノ意見ナリト述ヘ其ノ際特ニ計数的問題ニ触ルル必要ナカルヘシト付言シ比率問題ニ言及スルコトヲ回避セル趣ナリ

一、「十五日下院海軍委員会ニ於テ「ファイツシユ」ハ軍縮会議開催ノ主張ヲ繰返シ場合ニ依リテハ英、米、日ノ比率ヲ六、五、五トスルモ可ナルヘシトノ意見ヲ述ヘタリ

英、仏、紐育ニ郵送セリ

495 昭和13年2月26日 在米国斎藤大使より  
広田外務大臣宛(電報)

建艦問題に關する英米回答の反響について

別電 二月二十六日在米国斎藤大使より広田外務大臣宛  
記者会見における問答速記録

ワシントン 2月26日後発  
本 省 2月27日前着

第一〇七号

貴電第五八号ニ閲シ(1)月十二日付対米回答(1月十七日

往電第七五号ニ閲シ

一、大統領ハ十五日新聞記者会見ニ於テ日本ノ対米比率引

上ニ反対ナリヤトノ質問ニ答ヘ米ハ他国ニ対スル比率如

何ニ拘ラス大西太平両岸ヲ防備スルニ足ル艦隊ヲ必要ト

the answer itself shows.

Saito

496 昭和13年3月3日 在英國吉田大使より  
広田外務大臣宛(電報)

国防に關する英國政府白書の内閣報知

ロンדון 3月3日後発  
本 省 3月4日前着

第一六三号

政府ハ二日夜国防ニ関スル白書ヲ公表シ客年成立ノ五箇年計画進行状態及今後ノ計画ヲ説明シ且一九三九年度ハ本計画ノ絶頂期タルヘキコト及五箇年計画十五億磅ノ見積以上ニ経費ヲ要スルコトアルヘキ旨ヲ述ヘタリ

右白書ニ依レハ一九三八年度陸海空軍予算総額三四三、一一五〇千磅(前年ニ比シ六三、〇〇〇千磅増)内九千万磅ハ客年国防公債法ニ依リ支弁ス他ニ防空費八、五〇〇千磅ヲ計上ス

更ニ海軍ニ関シテハ目下(1月一日現在)建造中ノモノ五四七噸一九三八年度内ニ完成スベキモノ約六十隻一一〇千噸同年度中ニ起工セラルヘキ艦艇主力艦二、航空母艦

5 会議脱退後における諸交渉

一、大巡洋艦四、小巡洋艦三、潜水艦三、敷設艦三、河用砲艦二、駆逐艦母艦一、潜水艦母艦一及「フリート・エヤ・アーム」用工作船一

米仏へ転電シ在欧各大使へ郵送セリ

497 昭和13年3月4日

在米国斎藤大使より  
広田外務大臣宛(電報)

海軍拡張に関するヴィンソン法案下院委員会

通過について

ワシントン 3月4日後発  
本 省 3月5日前着

第一二二号

三日下院委員会ハ二〇対三ヲ以テ海軍拡張ニ閔スル「ビンソン」法案(往電第七五号米国海軍政策ニ関スル追加条項ハ單ナル字句上ノ修正ヲ経タル上付加セラル居レリ)ヲ可決セルカ右法案ハ圧倒的多数ヲ以テ下院ヲ通過スルモノト一般ニ観測セラレ居レリ委細郵報

英ヨリ仏ニ転電シ郵送セリ

英ヨリ仏ニ転電シ伊、蘇ニ郵送アリタシ

英ニ転電シ紐育ニ郵送セリ

英ヨリ仏ニ転電シ伊、蘇ニ郵送アリタシ

シ勢力均衡及同盟政策ニ復帰セントスルモノニシテ頗ル危険ナリト攻撃シタルカ(「チャーチル」ハ空軍ノ不足ヲ摘発セリ)結局右修正案ハ三五一対一三四票ニテ否決セラレ首相ノ政府案説明ハ三四七対一三三票ニテ可決セラレタリ米ニ転電シ在欧各大使ヘ郵送セリ

499 昭和13年3月22日

在米国斎藤大使より  
広田外務大臣宛(電報)

海軍拡張法案の米国下院通過について

ワシントン 3月22日後発  
本 省 3月23日前着

第一六五号

往電第一二二八号ニ閔シ

二十一日下院ハ二九二票対一〇〇票ノ多数ヲ以テ本件海軍拡張法案ヲ可決セルカ原案ノ建造計画ニ変更ヲ加ヘタル点ハ航空兵力ノ増強ニシテ原案ニ於テハ海軍航空機ノ建造ハ最大限度三千台トナリ居リタルヲ最少限度三千台ト為シ又新ニ三百万弗ノ飛行船建造ニ関スル権限ヲ政府ニ付与スルコトナリタル旨報セラル

英ニ転電セリ

498 昭和13年3月8日 在英國吉田大使より  
広田外務大臣宛(電報)  
英國下院における国防予算案討議の状況について

第一七二号

往電第一七〇号ニ閔シ

七日下院ニ於テ国防予算討議行ハレ首相ハ政府ハ軍備ヲ充実スルト共ニ歐州安定促進ニ努力スル方針ニシテ五箇年計画再軍備予算ハ当初ノ十五億磅ヲ相当超過スル見込ナル処若シ歐州安定実現セサレハ更ニ軍備拡張ノ要アリ然レトモ政府ハ決シテ連盟ヲ見捨テントスルモノニアラス依然トシテ集団平和機構擁護ノ方針ヲ堅持スルモノナルモ現在ノ連盟トシテ到底負担シ得サル重荷ヲ担ハシメントスルハ却テ連盟ヲ破滅ニ導クモノナリト述へ軍備ノ目的トシテ(1)本國及海外属領ノ保護(2)通商航路ノ保護及(3)戦争ノ際ニ於ケル同盟国ノ領土防禦ヲ挙ケタリ

右ニ対シ労働党ハ修正ヲ提議シ政府ハ集団平和機構ヲ破壊

500 昭和13年3月31日 在米国斎藤大使より  
広田外務大臣宛(電報)

一九三六年海軍条約エスカレーター条項の適

用に關し米國務長官の公式声明について

ワシントン 3月31日後発  
本 省 4月1日前着

第一八一号

往電第一七一號ニ閔シ

三十日国務長官ハ一九三六年海軍条約「エスカレーター」条項ヲ適用スヘキコトヲ公式ニ声明セリ尚新聞報ニ依レハ英米両国ハ暫行的ニ主力艦ヲ四万一千噸ニ制限スルコトニ合意成リタル模様ナルカ米国海軍側ニ於テハ右制限ヲ五万一千噸迄引上方ヲ考慮シ居ルモノノ如キ趣ナリ  
英ニ転電セリ英ヨリ仏ニ転電シ独、伊、蘇ニ郵送アリタシ

501 昭和13年3月31日 在英國吉田大使より  
広田外務大臣宛

日本側建艦計画に關する新聞記事報告

(4月25日接受)

昭和十三年三月三十一日

在英

特命全權大使 吉田 茂（印）

外務大臣 広田 弘毅殿

日本側建艦計画ニ関スル新聞記事報告ノ件

客年来日本側建艦計画通報ノ義務消滅シ從テ建艦計画ノ内容不明トナレル結果当地新聞紙其他ニ各種ノ報道掲載セラレタルカ右ノ内注目スヘキ記事論評概要左ノ如シ

一、客年十一月十四日「オブザーヴァー」紙（海軍記者執筆）

日本ハ十六吋砲搭載ノ主力艦四隻ヲ建造中或ハ將ニ建造ニ着手セントシツツアルモ右新艦ノ噸数カ条約ノ制限ヲ超過スルモノナリヤ否ヤハ不詳ナリ同時ニ米国ニ於テ一九三七年末及一九三八年初頭ニ起工サルヘキニ主力艦ハ三万五千噸備砲十六吋ナルカ英國ニテ目下建造中ノ五主力艦（King George V, Prince of Wales, Anson, Jellicoe, Beatty）ハ何レモ三万五千噸十四吋砲ニシテ更ニ目下仏独伊ニテハ三万五千噸十五吋砲艦ヲ各二隻宛建造シツツアリ又日本カ建艦通報ヲ肯セス然モ十六吋砲ニ執着スルニ於テハ他ノ列

強モ十六吋ヲ採用スルノ已ムナキニ到ルヘク延ヒテ防禦力充実ノ為艦型モ四万乃至四万五千噸ニ達スル懼アリ斯テハ単艦建造費、維持費及「ドック」設備費等ニ於テ著シク経費膨張ノ懼アリ

二、十一月二十二日「デイリー・テレグラフ」（海軍記者）  
「バイウオーター」

米国海軍情報部英國海軍省共ニ日本ノ建艦状況ニ関シテハ何等ノ情報ナク唯予算上日本ハ五千五百万磅ヲ新造艦艇ニ費シ居ル事ハ公知ノ事実ナルモ条約ニヨル制限ヲ遵守スヘキ何等ノ意思表示無ク日本海軍当局ハ極力建艦内容発表ヲ拒否シ居リ斯クテハ日本側ニ対スル疑惑ヲ生ミ米ハニ対抗スル為大艦巨砲主義ニ逆行スルノ懼アリ米海軍省ノ入手セル情報ニヨレハ日本ハ五ヶ年補充計画ヲ一九三七年四月開始セルモノノ如ク右ハ噸数不明ノ四主力艦、航空母艦一隻、巡洋艦八隻、潜水艦十五隻ヲ含ムモノト報セラル

三、一月十五日「デイリー・テレグラフ」（海軍記者）  
「イウォーター」

日本ハ世界最大ノ主力艦ヲ建造シツツアル旨ノ報ハ今ヤ確認セラレタリ右ハ各四万三千噸十六吋砲十門乃至十二門ニ

六、一月十八日「デイリー・テレグラフ」（海軍記者）  
日本ハ十八吋砲作製ノ技術ヲ有シ既ニ一九二一年十八吋搭載主力艦建造ノ計画アリタルカ如シ

七、一月十八日「テレグラフ」（バイウオーター）

英米政府ハ目下日本カ數隻ノ四万三千噸級主力艦ヲ建造シツツアル旨ノ報道ヲ確メント努力シツツアルモ若シ右ノ報確定ノ曉ニハ英、米、仏ハ直ニ協議ヲ開始シ米ハ十六吋砲搭載ノ為艦型ノ最大限度ヲ四万五千噸ニ為サンコトヲ主張スヘク英ハ既ニ工事進捗中ノ五隻ノ「キングジョージ」五世級改造ハ根本的設計ノ変更ニ等シク斯テハ竣工ヲ無限ニ遅ラスコトトナリ事實上到底不可能ナルヘシ英國海軍部内ニテハ英米ニ技術上及財政上劣ル日本トシテ斯ノ如キ建艦競争ヲ開始スルハ不得策ナル旨批評セラレ居レリ

同日「タイムズ」（社説）  
從來ノ海軍々備制限ノ歴史ヲ略述シ万一千卷間伝ヘラルル日本ノ建艦計画真ナリトセハ倫敦条約締約國ハ直ニ協議ヲ行シテハ英米ニ技術上及財政上劣ル日本トシテ斯ノ如キ建艦競争ヲ開始スルハ不得策ナル旨批評セラレ居レリ

五、同十七日「ニュース・クロニクル」紙  
伊太利海軍省発行ノ「Revista Marittima」ノ報スル所ニ依レハ日本ハ四万六千噸主力艦二隻ヲ建造中ニシテ他ノ一隻ハ近ク起工サルヘク更ニ同一計画中ニハ七千噸級巡洋艦五隻、千八百噸駆逐艦八隻潜水艦六隻ヲ含ム

5 会議脱退後における諸交渉  
日本海軍省「スポーツスマン」談ニ依レハ日本海軍ハ攻勢



note invoking the escalator clause in addition

refers specifically to the calibre of guns. French

Government do not propose to invoke the escalator clause and will refrain from exceeding

existing capital ship Treaty limits so long as

other continental European Powers do so. The

escalation notes are being communicated by the

United Kingdom and United States Governments

to the signatories of the 1936 Treaty on March

31st and published in the morning papers of

April 2nd. The United Kingdom Government

are communicating notes in similar terms to

German and Soviet Governments whose repre-

sentatives in London have been unofficially

informed of the position. After invocation of

the escalator clause discussions provided for

under Article 25(3) will take place as soon as

possible with a view to fixing if possible new

upper limits for sub-category (a) capital ships.

on capital ships of sub-category A.

The above action is motivated by the fact that upon the receipt of reports to the effect that Japan is constructing or has authorized the construction of capital ships of a tonnage and armament not in conformity with limitations and restrictions of the Treaty, the Government of the United States addressed an inquiry and the Japanese Government did not choose to furnish information with regard to its present naval construction or its plans for future construction.

(欄外記入) 国交 1 日米大使間ノ非公報ノ申文

504 昭和13年4月2日 在英國吉田大使より  
在米國斎藤大使宛 (電報)

主力艦艦型増大に關する英米公文の交換ヤハ  
たる公文四月一日發表ヤハノタリ英國側公文ハ英國政府ハ

今回主力艦艦型ニ関ハル制限ヨリ離脱スルノ必要ヲ認ムル  
ニキハルカ右ハ日本カ制限超過主力艦ヲ建造又ハ計画シツ  
ツタル眞報ヤハノ其ノ真偽ヲ確カメントヤル処日本政府ハ  
真相發表ヲ拒否ヤルヨリ右報道ニ譖ナキヤノナリト認メタ  
ル結果ナリト述べ米國側公文ハ艦型ノミナラス砲径ニ対ス  
ル制限ヨリヤ離脱ベル眞ヨ明示セリ仏國側公文ハ仏政府ハ  
英米ノ決意ヲ諒メスルヤ再ヒ何等カノ協定ノ成立ヤハ  
ア希望シ歐州大陸国ニ於テ現存制限ヲ遵守スル限り仏ヤ之  
ニ従フ眞ヨ述く居ノリ米ニ転電シ在欧各大使、寿府ニ郵送  
ヤリ

5 会議脱退後における諸交渉

British Embassy, Tokyo.

1st April, 1938

(欄外記入) 国交 1 日米大使内次官ニ手交セサムハ  
~~~~~

503 昭和13年4月1日 在本邦グル一米國大使  
在本邦グル一米國大使  
広田外務大臣宛

主力艦艦型増大に關する英米公文の交換ヤハ  
たる公文發表ヨリハ

With reference to Article 25 of the Naval

Treaty signed in London on March 25, 1936 I

have the honor to notify Your Excellency in

accordance with paragraph two of that Article

that the Government of the United States of

America finds it necessary to exercise the right

of escalation reserved in paragraph one and of

effecting a departure from the limitations and

restrictions of the Treaty.

The proposed departure relates to the upper limit changes in capital ships of sub-category A

and to the calibre of guns which may be mounted

口ノスハ 4月2日後発  
本 省 4月3日前着

505 昭和13年4月4日 在米國斎藤大使より  
在本邦グル一米國大使  
広田外務大臣宛 (電報)

主力艦艦型増大に關する英米公文の交換ヤハ  
たる公文發表ヨリハ

海軍拡張法案ニ關する上院海軍委員會ウオル  
ハノ宛米國務長官の書翰ヨリハ

ワシントン 4月4日後発  
本 省 4月5日前着

## 第一八六号

曩ニ上院海軍委員長「ウォルシュ」ヨリ目下同院ニ付議中ノ海軍拡張法案ニ関連シ質問ヲ提出シタルニ対シ三日国務長官ハ同委員長宛書翰ニ於テ回答ヲ為シ  
(イ) 所謂海軍防禦線 (naval frontier) ヲ設ケ米海軍ノ活動ヲ右線内ニ局限スルコトハ右線以外ニ在ル米人ヲ攻撃ニ晒スコトトナリ不可ナルコト

(ロ) (日本ニ対米「パリティー」ヲ許シ又ハ主力艦、航空母艦ノ廢止ニ賛成ナルヤトノ質問ニ対シ) 次回海軍會議開催ノ場合米國カ如何ナル立場ヲ採ルヘキカヲ前以テ述フルコトハ全然不可能ニ属スルコト

(ハ) 比島ニ独立ヲ認メタル事実ヲ考慮セハ五、五、三ノ比率ヲ繼續スルノ必要ナキニアラスヤトノ質問ニ対シ右比率ハ太平洋島嶼ノ防禦制限協定、四国協約、九国条約等華府會議ニ於テ決定セラレタル諸協定ト相互ニ相関連シ是等ハ全部合体シテ太平洋ノ平和維持ノ組織ヲ為スモノトシテ関係国ニ依リ承認セラレタルモノナルカ爾來太平洋ノ情勢ハ急激ナル変化ヲ來シ日本ハ実力ヲ以テ支那ノ広大ナル地域ヲ占領シ四国協約ヲ無視シ九国条約ニ基キテ

闘用船舶四十六隻（主力艦三、航空母艦二、軽巡九、駆逐艦二十三、潜水艦九、経費七億三千百万弗）、航空機九百五十台（経費一億六百万弗）、補助艦艇二十六隻（経費約二億七千五百万弗）ノ建造権限ヲ規定シ居リ右建造着手ニ當リテハ更ニ経費ノ具体的の支出ニ付議会ノ同意ヲ要スルコトトナリ居レリ委細郵報

英ヘ転電セリ英ヨリ仏、伊、独、蘇ヘ郵送アリタシ  
507 昭和13年5月10日 在米国斎藤大使より 広田外務大臣宛（電報）  
海軍拡張法案に関し上下両院協議会において  
合意に達した内容について

ワシントン 5月10日後発 本 省 5月11日前着  
第二六一号 往電第二五一号ニ閲シ

英ヘ転電セリ英ヨリ仏、伊、独、蘇ヘ郵送アリタシ  
508 昭和13年6月4日 在英國吉田大使より 字垣外務大臣宛（電報）  
議会に提出された英國海軍追加予算案に関する  
第三九七号

ロンドン 6月4日後発 本 省 6月5日前着

## 招集セラレタル會議ニ参加ヲ拒絶シ華府海軍條約ヲ廢棄シ如何ナル海軍制限ニモ服セサルコトヲ明カニセリ從テ

太平洋ノ情勢變化シ他ノ基礎ニ基ク協定可能トナラサル限り将来ニ於ケル比島ノ処分如何ニ拘ラス右比率ノ原則ヲ堅持スルコトヲ要ス等ヲ述ヘ居レリ委細郵報  
(イ) 現下ノ世界情勢ニ鑑ミ海軍軍縮會議開催案ハ実効ナカルヘク右會議開催ニ當リテハ前以テ政治的經濟的協定ノ成立スルコトヲ要ス等ヲ述ヘ居レリ委細郵報

英ヘ転電セリ英ヨリ仏、独、伊、蘇ニ郵送アリタシ  
506 昭和13年5月4日 在米国斎藤大使より 広田外務大臣宛（電報）  
海軍拡張法案上院において可決について  
ワシントン 5月4日後発 本 省 5月5日前着  
第二五一号 往電第二四九号ニ閲シ

三日上院ハ五十六票対二十八票ヲ以テ本件海軍拡張法案ヲ可決シタルカ上院ノ修正ニ対シテハ下院ハ直ニ同意スルモノト見ラレ居リ尚上院通過案ニ依レハ冒頭往電修正ノ外戦居レリ

5 会議脱退後における諸交渉  
本件海軍拡張法案ハ其ノ後上下両院協議会ニ付託セラレタルカ九日同協議会ノ意見完全ニ合致ヲ見タル趣ニシテ右ニ依レハ三万五千噸以上ノ主力艦ノ建造ハ他国カ同種ノモノヲ建造スル場合ニ限ルヘシト為ス上院修正案ハ（往電第二

潜水艦三隻十七万七千七百  
同 小三隻八万三千百三十  
航空母艦一隻六万二千八十  
主力艦二隻三万九千六十  
同 小三隻八万三千百三十  
潜水艦三隻十七万七千七百

駆逐艦母艦一隻十一万五千六百五十  
潜水艦母艦一隻二千五百五  
敷設艦三隻三千五  
河用砲艦二隻七万二百九十

二、右ノ内主力艦及大型巡洋艦ノ建造費ハ何レモ兵装費ニシテ船体及機関ノ費用ヲ含マサル処「タイムス」ハ右ニ鑑ミ是等諸艦ノ建造命令ハ本会計年度末又ハ末近ク迄ハ発セラレサルヘシト述へ「ガーディアン」ハ主力艦最大噸数ニ関シ未タ米国側トノ話合纏マラサル処英海軍当局ハ四万一千噸トシ度キ意向ナリト伝ヘラレ居ル旨報ス  
仏、伊、独ニ郵送セリ

509 昭和13年7月1日

在英國吉田大使より  
宇垣外務大臣宛(電報)

## 主力艦及び備砲の制限に関する下院議員の質問に対する海軍大臣の答弁について

ロンドン 7月1日後発  
本省 7月2日前着

第五二七号

往電第五一九号ニ関シ

一、三十日下院ニ於テ海相ハ一議員ノ質問ニ對シ(同日英米仏及英獨間ニ夫々主力艦噸数ヲ四万五千噸ニ制限スル旨ノ「プロトコール」調印セラレタルカ蘇連ヨリモ近ク同意ノ回答ヲ得ヘシト希望セラルルコト)備砲制限ハ依然十六吋ナルコト(三)四万五千噸ノ制限ハ英ノ希望シタルヨリモ高キモ右以下ニテハ協定ニ達シ得サリシコト(四)英ハ目下ノ處四万噸ヲ超ユル主力艦建造ノ意向ナク且他ノ歐州海軍國カ同様右四万噸制限ヲ超エサランコトヲ期待(trust)スル旨ヲ條約關係國全部ニ対シ申入レタルコト(五)英ノ一九三八年度計画ノ主力艦二隻ハ十六吋砲ヲ搭載シ四万噸ヲ超エサルヘキコト等ヲ發表シ議員ヨリ政府ハ本件ニ關シ日本政府ト会談ニ入ルヘキヤト問ヒタルニ對シ His Majesty's Government is always willing to discuss these matters with Japanese Government ト答ヘ更ニ英側ヨリ会談ヲ開始スヘキヤト問ヘルニ対シ即答シ難シト答弁セリ(議事録郵送ス)

一、「タイムス」社説ハ米国ノ反対ノ為ニ四万五千噸以下ニ引下ケ得サリシヲ遺憾トシタルカ「テレグラフ」紙上「バイウォーター」ハ英米間意見ノ相違ハ全ク技術付ス

的考慮ニ基クモノニシテ兩者間何等ノ摩擦ナク米カ四万五千噸ヲ建造スルトモ英ハ之ト競争セントハセサルヘシ本件協定カ日本ニ正式通報セラルヘキヤハ未定ナル処日本ハ此ノ新主力艦カ倫敦条約制限ヲ超エサルコトヲ非公式ニ仄メカシタルヤモ知レサルモ尚公式ニハ全然沈黙ヲ守リ居レリト述ヘタリ

米ヘ転電シ在欧各大使ヘ暗送セリ

510 昭和13年7月9日

在英國吉田大使より  
宇垣外務大臣宛

## 一九三六年ロンドン海軍条約修正に関するパ

イウォーターの記事報告

(8月5日接受)

第四〇一号 昭和十三年七月九日

在英

特命全權大使 吉田 茂(印)

外務大臣 宇垣 一成殿

一九三六年倫敦海軍条約修正ニ関スル「バイ  
ウォーター」記事ニ関スル件

六月三十日当地ニ於ケル一九三六年倫敦海軍条約修正議定

書調印ニ關スル七月一日付「デリーテレグラフ」紙上「バイウォーター」ノ記事ニ関シテハ要点電報シ置キタル処右記事ハ本問題ニ對スル英國其他各國ノ態度ニ論及シ居ルニ付何等御参考迄大要訳出ノ上右新聞切抜二部ト共ニ茲ニ送付ス

(別添)

主力艦噸数四万五千噸ニ制限決定

(七月一日「デリーテレグラフ」)

一、(前略)英國政府ハ本議定書調印後米仏独三國政府ニ對シ英國政府ニ於テハ目下ノ所四万噸ヲ超ユル主力艦建造ノ意向ナキ旨並ニ仏獨兩國ニ於テモ右四万噸ノ制限ニ從ハシコトヲ希望スル旨公文ヲ以テ通告セリ仏國政府ハ右ニ對シ歐洲大陸諸國全部カ從來ノ三万五千噸ノ制限ヲ守ルニ於テハ仏國モ三万五千噸ノ制限ニ從フヘキ旨ヲ回答シ来レルカ獨國ヨリハ未タ回答ナシ

一、伊國政府ハ一九三六年倫敦条約ニ加入シ居ラサルモ爾來同國ハ右条約制限内ニ於テ建艦シ居リ且英伊協定ニハ其効後伊國ガ速ニ倫敦条約ニ加入スヘキ旨ノ規定アリ三、英國ノ本年度計画主力艦二隻ハ大体十六吋砲四万噸ト

ナルキヤジテ「ネルヘン」(IIIIL' 九五〇噸) 及「ハ  
ン」(四一' 一〇〇噸) ハ廿噸 在ルキカ防禦及速

力ノ点ニ於テハ日本建造中ノ「キンクハマーハ」五世級

五隻 (三五' ○〇〇噸十四支) ハ近似スシ要スルニ

数制限ヲ四万五千噸ニ引上ケタルハ差当リ保全的措置タ

ルニ止リ之カ適用或ハ其必要ヲ見シテ已ムヘシ

四、最大噸数ヲ四万五千噸トスヘキカ四万噸トスヘキカニ

関スル米英両国間意見ノ扞格ハ技術的考慮ニ基クモノニ

シテ即チ米海軍専門家ハ英側ニ比シ更ニ多数ノ巨砲搭載

ヲ希望シ居レルニ依ルモノナリ英米両国間ニハ何等ノ摩

擦ナク米国ハ新制限内ニテ自由ナル艦型ヲ建造シ得ベク

英國ハ之ト競争セントヘヤサルヘン

五、本件取極ヲ公式ニ日本ニ通報スヘキヤ否ヤハ未定ナル

処日本ハ其新艦建造計画ニ関シ公式ニハ全ク沈黙ヲ守リ

居ルモ非公式ニハ其新艦建造カ倫敦条約ノ制限内ナルコ

トヲ仄カシタルヤモ知レス

~~~~~

511 昭和十三年七月十一日 在英國吉田大使より

宇垣外務大臣宛

在英

特命全權大使 吉田 茂(印)

外務大臣 宇垣 一成殿

一九三六年倫敦海軍條約修正議定書送付ノ件

一九三六年倫敦海軍條約中主力艦單艦噸數及備砲口徑ノ制

限ニ関スル條項改訂方ニ関シ從来英國政府及關係各國政府

間ニ交渉行ハレタル結果六月三十日當地ニ於テ英米仏三国

間及英獨両国間ニ夫々主力艦最大噸数ヲ四万五千噸、備砲

口径ハ從來通十六吋ニ制限スル趣旨ノ議定書調印セラレ其

旨同日下院ニ於テ「ダフ・クーペー」海相ヨリ発表セラレ

タル次第ハ既電ノ通ナル処今般右英米仏三国間ノ議定書白

書ヲ以テ公表セラタルニ付右五部前記海相発表ニ關スル

議事録写ト共ニ茲ニ送付ベ

本信写送付先 在仏、独、伊各大使(付属各一部)

（六月二日）

在英

一九三六年倫敦海軍條約修正議定書

(六月二日)

昭和十三年七月十一日

在英

特命全權大使 吉田 茂(印)

外務大臣 宇垣 一成殿

一九三六年倫敦海軍條約修正議定書送付ノ件

一九三六年倫敦海軍條約中主力艦單艦噸數及備砲口徑ノ制

限ニ關スル條項改訂方ニ関シ從来英國政府及關係各國政府

間ニ交渉行ハレタル結果六月三十日當地ニ於テ英米仏三国

間及英獨両国間ニ夫々主力艦最大噸数ヲ四万五千噸、備砲

口径ハ從來通十六吋ニ制限スル趣旨ノ議定書調印セラレ其

旨同日下院ニ於テ「ダフ・クーペー」海相ヨリ発表セラレ

タル次第ハ既電ノ通ナル処今般右英米仏三国間ノ議定書白

書ヲ以テ公表セラタルニ付右五部前記海相発表ニ關スル

議事録写ト共ニ茲ニ送付ベ

本信写送付先 在仏、独、伊各大使(付属各一部)

(四月二日)

PROTOCOL MODIFYING THE TREATY  
OF THE 25TH MARCH, 1936, FOR THE  
LIMITATION OF NAVAL ARMAMENT.

London, June 30, 1938.

provided for in paragraph (1) of the said Article  
to depart from the limitations and restrictions  
of the treaty in regard to the upper limits of  
capital ships of sub-category (a);

And whereas consultations have taken place as  
provided in paragraph (3) of Article 25, with a  
view to reaching agreement in order to reduce  
to a minimum the extent of the departures  
from the limitations and restrictions of the  
treaty;

And whereas by reason of Article 4 (1) of the  
said treaty the maximum calibre of gun carried  
by capital ships is 16 inches (406 mm.);

And whereas on the 31st March, 1938, the  
Government of the United States of America  
and the Government of the United Kingdom of  
Great Britain and Northern Ireland gave notice  
under paragraph (2) of Article 25 of the said  
Treaty of their decision to exercise the right

The undersigned, duly authorized by their  
respective Governments, have agreed as follows:

1. As from this day's date the figure of  
35,000 tons (35,560 metric tons) in Article  
4(1) of the said treaty shall be replaced  
by the figure of 45,000 tons (45,720  
metric tons).
2. The figure of 16 inches (406 mm.) in  
Article 4 (2) remains unaltered.

3. The present protocol, of which the French and English texts shall both be equally authentic, shall come into force on this day's date.

In faith whereof the undersigned have signed

the present protocol. Done in London the 30th day of June, 1938.

For the Government of the United States of America:

HERSCHEL V. JOHNSON.

For the Government of the French Republic:

ROGER CAMBON.

For the Government of the United Kingdom of Great Britain and Northern Ireland:

ALEXANDER CADOGAN.

#### PROTOCOLE.

Considérant que l'article 4 (1) du Traité pour

Considérant que des consultations ont eu lieu, conformément au paragraphe (3) de l'article 25, en vue de réaliser un accord pour réduire au minimum la portée des dérogations aux limitations et restrictions du traité;

Les soussignés, dûment autorisés par leurs Gouvernements respectifs, sont convenus de ce qui suit:

1. A dater de ce jour, le chiffre de 35,000 tonnes (35,560 tonnes métriques) de l'article 4 (1) du traité sera remplacé par le chiffre de 45,000 tonnes (45,720 tonnes métriques).
2. Le chiffre de 16 pouces (406 m/m) de l'article 4 (2) est maintenu sans changement.
3. Le présent protocole, dont les textes français et anglais feront également foi, entrera en vigueur à la date de ce jour.

la Limitation des Armements navals signé à Londres le 25 mars 1936 a stipulé qu'aucun navire de ligne ne doit avoir un déplacement-type supérieur à 35,000 tonnes (35,560 tonnes métriques);

Considérant que, en raison de l'article 4 (2) dudit traité le maximum du calibre de l'artillerie portée par les navires de ligne est de 16 pouces (406 m/m);

Considérant que, à la date du 31 mars 1938, le Gouvernement des Etats-Unis d'Amérique et le Gouvernement du Royaume-Uni de Grande-Bretagne et d'Irlande du Nord ont notifié, conformément au paragraphe (2) de l'article 25 dudit traité, leur décision d'exercer le droit stipulé au paragraphe (1) dudit article de déroger aux limitations et restrictions du traité relatives aux limites supérieures des navires de ligne de la sous-catégorie (a);

En foi de quoi, les soussignés ont signé le présent protocole. Fait à Londres le 30 juin 1938.

Pour le Gouvernement des Etats-Unis d'Amérique:

HERSCHEL V. JOHNSON.

Pour le Gouvernement de la République française:

ROGER CAMBON.

Pour le Gouvernement du Royaume-Uni de Grande-Bretagne et d'Irlande du Nord:

ALEXANDER CADOGAN.

512 昭和13年7月21日 訂田外務大臣宛(電報)  
日本外務省大蔵省(電報)

日本外務省大蔵省(電報)

11月4日  
London Naval Treaty Bill 記載於「海  
相」今次条約内容及成立の経緯ハ概説ハ日本ハ十ヶ年間建  
造母ナルコト確ナルキヤ右ニ超ハニヤハ建造母ナニヤ右  
ヤニ付テハ何等報道ナシ日本ハ条約所定以上ノ備砲又ハ排  
水量艦建造ニ依リ軍拡競争ヲ「バターネ」ヤナル並再川保  
障ヤリ吾人ハ右ニ關シ極メテ聰明ナル日本国民ハ sound  
sense ハ或程度信頼シ得シテ述くタリ尚ナカガ定規難  
出現ノ場合ニズベル態度ニ付海軍政務次官ハ十ヶ年砲題  
ハ専門家ノ充分研究シ居ル所ナリテ如クタニ  
ハ米伊ハ郵送セリ

513 昭和13年9月9日 在本邦クレーガー英國大使

在本邦クレーガー英國大使

外務大臣宛  
ノ級巡洋艦五隻の裁備保留ヲ斯ニ認可

BRITISH EMBASSY, TOKYO.

9th September, 1938.

Your Excellency,

In a Note addressed to His Excellency the Japanese Ambassador in London on the 22nd December, 1936, His Majesty's Principal Secretary of State for Foreign Affairs had the honour to inform Mr. Yoshida that the requirements of the national security of the United Kingdom necessitated the retention of the five sub-category (b) cruisers: CARDIFF, CERES, CALEDON, CALYPSO and CARADOC. It was explained that the retention of those vessels would cause the tonnage for the cruiser category permitted under the London Naval Treaty 1930 (339,000 tons) to be exceeded by 20,270 tons, and that His Majesty's Government accordingly proposed to have recourse to Article 21 of the Treaty in order to keep the excess tonnage in question. An undertaking was added that (a) the vessels would be retained for a maximum of five years peace service and (b) they would be used not

as cruisers but as anti-aircraft ships, which would involve the substitution of a lighter armament for the existing 6-inch gun armament.

2. His Majesty's Government intend to abide by their undertaking given in December, 1936, to scrap five cruisers of the "C" class or other class whose overall tonnage shall be equal to or possibly greater than the overall tonnage of the five cruisers mentioned above before the end of 1941. It is evident however that the substitution of anti-aircraft armament for 6-inch gun armament in vessels which are to be scrapped in 1941 is not an economical arrangement since, although the anti-aircraft armament could be taken out and used for other ships when the

would expose His Majesty's Government to considerable criticism from the financial point of view.

3. His Majesty's Government propose, therefore, to retain the existing armament in the five vessels mentioned in paragraph one above; to have the 6-inch gun armament removed from five other "C" class cruisers with a longer estimated life; and to have the armament in those vessels replaced by lighter anti-aircraft armament.

I avail myself of this opportunity to renew to Your excellency the assurance of my highest consideration.

(Signed) R.L. Craigie

His Excellency

General Kazushige Ugaki,

His Imperial Japanese Majesty's  
Minister for Foreign Affairs,

乙級巡洋艦五隻ノ装備保留方等ニ関スル昭和十三年九月九日付英國大使發字垣外務大臣宛

## 公文仮訳

以書翰啓上致候陳者英国外務大臣ハ一九三六年十一月二十日付在倫敦日本國大使宛書翰ニ依リ吉田氏ニ対シ連合王國ノ國家的安全ノ要件カ乙級巡洋艦五隻〔カーティフ」「ヤンベ」「カルデン」「カリブソ」「カラドック〕ノ保留ヲ必要トスル旨通報スルノ光榮ヲ有シタル次第ニ有之候右艦船ノ保留ハ一九三〇年倫敦海軍條約ニ依リ許容セラレタル巡洋艦種ニ対スル噸数（三三九、〇〇〇噸）ヲ一〇、二七〇噸大超過セシムルコトトナル旨並英國政府ハ從ツテ本件超過噸数ヲ保留センタメ同條約第二十一条ノ援用方提議スル旨説明致置候尚(イ)右艦船ハ最大限五ヶ年ノ平和的勤務ノタメニ保留セラル旨並(ロ)右艦船ハ巡洋艦トシテニ非ス現有六吋砲裝備ヲヨリ一層輕微ナル裝備ヲ以テ代フルコトニ依リ防空艦船トシテ使用セラルヘキ旨ノ誓約ヲ致置候

二、英國政府ハ一九四一年末迄ニ前記巡洋艦五隻ノ總噸数ト同等又ハ其以上ノ噸数ノC級又ハ他級巡洋艦五隻ヲ廢

棄スベシトノ一九三六年十一月ノ誓約ヲ遵守スルノ意向ニ有之候併乍ラ一九四一年ニ於テ廃棄セラルヘキ艦船ニ對シ防空裝備ヲ以テ六吋砲裝備ニ代フルコトカ經濟的措置ナラナルコトハ明瞭ニ候蓋シ本件五隻ノ艦船カ廃棄セラレタル場合防空裝備ハ撤去セラレ他ノ艦船ニ使用セラレ得ト雖モ裝備ヲ設置シ之ヲ斯ル短期間後再度撤去スルニ要スル費用ハ概シテ空費トナル次第ニ有之斯ル措置ハ經濟的見地ヨリ英國政府ヲ批判ノ対象タラシムヘク候三、英國政府ハ依而第一節記載ノ艦船五隻ノ現有裝備ヲ保留スルコトヨリ長期ノ艦齡ヲ有スト見積ラレ居ル他ノC級巡洋艦五隻ヨリ六吋砲裝備ヲ撤去スルコト此等艦船ニ於ケル裝備ヲ一層輕微ナル防空裝備ニ依リ代ランムル様提議致候

右申進旁本使ハ茲ニ重ネテ閣下ニ向テ敬意ヲ表シ候

敬具

## 4 日本への新條約加入招請問題

514 昭和11年4月7日

在英國藤井臨時代理大臣より  
有田外務大臣宛(電報)

## クノーキー外相より新海軍条約に日本加入方

## 照會の件

付 記※昭和十一年四月三日クノーキー英国外務大臣より

在英國藤井臨時代理大臣宛書簡

新海軍条約加入方招請に關する英國政府書簡

ロ・ムン 4月7日後発

本 省 4月8日前着

第二十六号

本官宛三日付書翰ニテ「クノーキー」ハ外相ノ名ヲ以テ新條約ニ關シ何等御意見アラハ喜ヒカラ承ルト共ニ御説明致スベク他方同條約第三十一条（往電第100号）ニ基キ日本政府カ本條約ニ加入セラレントハ英政府及他ノ右條約署名国政府ノ希望スル所ナリュノ趣旨ヲ申越セリ

右書翰郵送セリ

米、仏、伊へ暗送セリ

会議脱退後における諸交渉

Sir,

Foreign Office, S. W. I.  
3rd April, 1936.

In my note of 25th March I had the honour to communicate to you, for transmission to the Japanese Government, certified copies of the text of the Treaty for the Limitation of Naval Armament and of the Protocol of Signature, signed in London on 25th March on behalf of the United States of America, the Commonwealth of Australia, Canada, France, the United Kingdom of Great Britain and Northern Ireland, India and New Zealand. These copies were transmitted in accordance with the provisions of Article 32 of the Treaty and paragraph 3 of the Protocol, and they were accompanied by a copy of the Additional Protocol